

「誰もが行き活き！里山モビリティ&アクティビティ革命」
事後評価報告書

2025年3月

ふじみ MaaS 協議会

株式会社イーエムアイ・ラボ、富士見高原リゾート株式会社、
合同会社つくえラボ、地域モビリティプロジェクトチーム

目 次

1. 報告書要約	P3
2. 基本情報	P3
3. 事業概要	P4
4. 事後評価実施概要	P6
5. 事業の実績	P6
6. アウトカムの分析	P22
7. 成功要因・課題	P38
8. 結論	P41
9. 添付資料	P45

1. 報告書要約

本事業は、中山間地域である長野県富士見町において「誰もが行き活き！里山モビリティ&アクティビティ革命」のテーマのもと、車の運転ができるできないにかかわらず暮らす人・訪れる人誰もが、常に安心・楽しみ・生きがいを感じられる地域・社会となることを目的に活動を行なってきた。さらに、移動の目的となる魅力的な居場所（イベント・行き先）、移動のための仕組み作りを実施した。

余暇活動のための外出支援のニーズ調査、イベントの満足度調査、「出かけるきっかけ」となる居場所づくり（送迎付きイベント）、ユニバーサルツーリズムの実践をするとともに、パーソナルモビリティや車椅子の電動アシスト機構、LINE アプリの開発を行なった。

実行団体の得意分野を活かした活動が展開でき、さらに地域の協力団体のご支援を得られたことから、これまで富士見町にはなかったサービスやツールの開発が実施できた。高齢化の進む地域での共通の課題や、障がい者の野外アクティビティの受入れ事例の少ない現代においては、本事業における取り組みはその解決策のひとつを体現している。

2. 基本情報

- (1) 実行団体名
株式会社イーエムアイ・ラボ、富士見高原リゾート株式会社、
合同会社つくえラボ、地域モビリティプロジェクトチーム
- (2) 実行団体業務名
誰もが行き活き！里山モビリティ&アクティビティ革命
- (3) 資金分配団体名
公益財団法人長野県みらい基金
- (4) 資金分配団体事業名
誰もが活躍できる信州「働き」「学び」「暮らし」づくり事業
- (5) 実施期間
2022年7月1日から2025年3月31日
- (6) 事業対象地
長野県諏訪郡富士見町

3. 事業概要

1) 事業によって解決を目指す社会課題

① 車がないと生活・社会参加ができない・多様化する個別ニーズ（暮らす人にとっての課題）

富士見町は八ヶ岳の麓に位置し、釜無・南アルプスなど四方を山で囲まれた自然豊かな地域だが、点在する39集落はどこも過疎化・高齢化が進み、それとともに社会課題の多様化や加速度的な進行が顕著。

町内は「まちなかエリア」とよばれる中心地域内でさえ、病院、役場、スーパーなどの拠点間をつなぐ道の勾配が激しい。中心地から4kmほど離れた「落合河路地区」では集落内でも標高差があり、そこで暮らす高齢者にとってはごみ捨てやアグリモール買い物バスのバス停に行くことさえ困難。また、外出した際にも早く歩けない、トイレが心配、介助者や同行者の負担が増えてしまう、といったことを考えて外出を控えてしまうという人も多く、家にこもりがちになる大きな要因となっている。こうした状況は町内に点在する他集落でも同様である。

既存の公共交通サービスは利用者が限定的で、免許をそもそも持たない子供や学生・生活困窮者・障がい者、免許を返納した高齢者（多くの方は返納に不安を感じている）は、結局は家族や行政の送迎に頼らざるを得ず、部活動や趣味、気軽に友人と出掛ける・訪ねるといった「楽しみ」や、場合によっては「学ぶ・働く機会」を制限されてしまう。こうした状況が若年層の自立や高齢者の心身の健康・生きがいなどを阻害し、それぞれの社会的フレイル、生きづらさの多様性・複雑性を助長していると考えられる。

② 車がないと観光できない（訪れる人にとっての課題）

電車で訪れた車・免許を持たない都心部在住の観光客は、町内での自由な移動手段がないため行ける場所が限られてしまう。こうしたことが町の魅力を多くの観光客に知ってもらう機会を逃し、地域の経済成長や移住希望者の妨げの要因と考えられる。

③ 景観や治安の悪化（暮らす人、訪れる人双方にとっての課題）

中山間地域では過疎・少子高齢化を背景に担い手不足が深刻化。移動手段に限られることが、そうした状況をより助長している。町内でも中心地から離れた「里山エリア」では人が手を入れることで自然と暮らしを両立してきたが、担い手不足により耕作放棄地や空き家が増加し景観・治安が損なわれ、そこに暮らす人たちの負担となっている。また、この状況は豊かな自然を求めて訪れる人（観光客、移住希望者、等）にとってもマイナスに映ってしまう。

(2) 最終受益者、直接対象グループとその人数

最終受益者は、子ども、高齢者、障がい者、観光客（約200人）。

あらゆる理由で運転免許所を持たない町民、観光客、他（約 6000 人）。

(3) 事業の概要（中長期アウトカム、短期アウトカム、活動の概要）

中長期アウトカム

中山間地域である富士見町において、車の運転ができるできないにかかわらず暮らす人・訪れる人誰もが、常に安心・楽しみ・生きがいを感じられる地域・社会となる（社会的フレイル解消）。

短期アウトカム

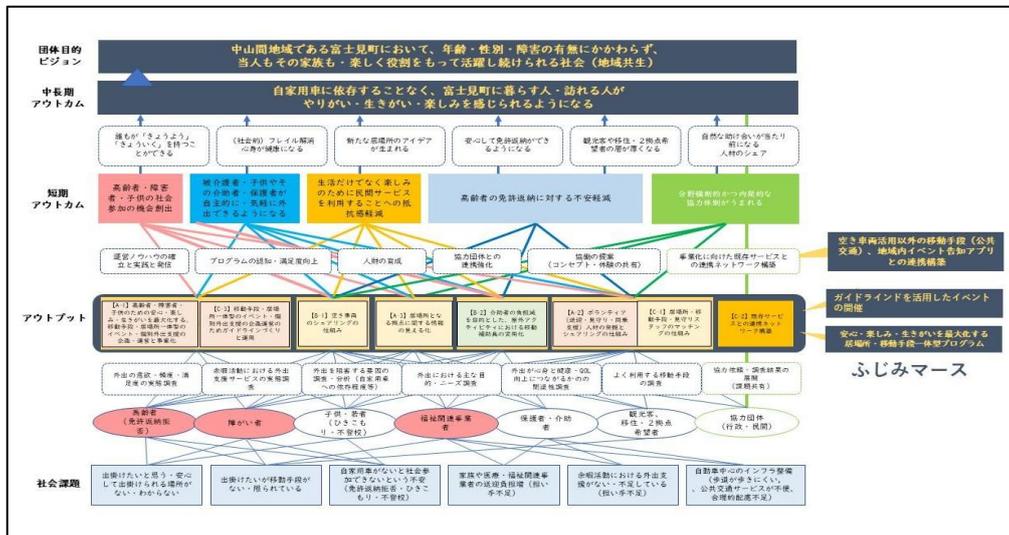
1. 高齢者・障害者・子供の社会参加の機会創出
2. 被介護者や子供とその介助者や保護者が自主的に気軽に外出できるようになる
3. 生活だけでなく楽しみのために既存の公共交通機関や民間サービスを利用することへの抵抗感軽減
4. 分野横断的、内発的な協力体制が生まれる
5. 高齢者の免許自主返納に対する不安軽減

活動の概要

本事業では富士見町を拠点に以下事業に取り組み、暮らす人・訪れる人、誰もが行（活）きやすい中山間地域におけるまちづくりを目指す。

1. 安心・楽しみ・生きがいを最大化する移動手段・居場所一体型の高齢者・障害者・子供のための社会参加推進プログラムづくり（居場所づくり）
2. 町内の空き車両を活用したモビリティ運用の仕組みづくり
4. 既存サービスとの連携ネットワーク（ふじみ MaaS）構築と事業化検討

(4) 事業概念図



(5) 事業で目指した出口・持続化戦略の概要

1. ふじみ MaaS を企画・運営する共同事業体の設立。共同事業者からの出資金、クラウドファンディング、寄付金（企業版ふるさと納税等）、特許技術のライセンス契約、徴収した利用料（町民＜観光客）で運営。

2. 町内のあらゆる既存サービスと連携した運営体制

3. ハヶ岳観光圏と連携し、全国からの観光客誘致やインバンド拡大→収益性向上、移住希望者増

4. 人材発掘、育成、シェア・マッチング→持続可能性・再現性向上

5. 学校・企業・自治体の研修・視察や学生インターンを受け入れる→収益・継続性向上、ふじみ MaaS の横展開

4. 事後評価実施概要

内部/外部	評価担当分野	氏名	団体・役職	時期
外部	プログラムオフィサー	中島恵理	長野県みらい基金	2025年1-3月
外部	事業経過と到達点、評価の検証	若杉加奈	富士見町社会福祉協議会	2025年3月
内部	事後評価全般の実施と報告書の作成	馬淵沙織	合同会社つくえラボ	2025年1-3月
内部	事後評価全般の実施と報告書の作成	藤田 然	富士見高原リゾート(株)	2025年1-3月
内部	事後評価全般の実施と報告書の作成	篠原克徳	地域モビリティプロジェクトチーム	2025年1-3月
内部	事後評価全般の実施と報告書の作成	西 教生	(株)イーエムアイ・ラボ	2025年1-3月

5. 事業の実績

活動とアウトプットの実績

1. 事業で介入を実施した受益者とその数

高齢者：1200名

障がい者：921名

子ども：110名

その他：311名

1. 高齢者・障害者・子供のための安心・楽しみ・生きがいを最大化する、移動手段・居場所一体型のイベント・個別外出支援の企画・運営と事業化

指標	移動手段・見守り一体型のイベントの数・種類、楽しみを目的とした個別外出支援サービスの立ち上げ、イベントや個別支援の事業化
初期値	不定期開催

目標値	イベント数月に 5 回以上開催できる、個別外出支援サービスの収益性が前年比で向上している									
実績値	<p>1. みんなの居場所事業のスキームを活用し、7つの協力団体及び地域の人たちと一緒に、誰もが参加できる移動手段・居場所一体型イベントを 67 回（月4回開催・平均参加者 8.4人）実施。魅力的な居場所に関する要件や適切な活動内容、企画・運営フローなどを調査。延べ 562 名が参加し、内、常連の方約 10 名にアンケート・ヒアリングをおこない、活動の評価を行なった。実証終了後も開催規模（月4回開催・平均参加者 10.6人）を維持。イベントにおいて参加者の満足度は 100%</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶実証期間中のイベント数は月に平均 6.7 回/32 名 ▶実証期間 2022 年 7 月～2023 年 11 月 月平均 約 4 回/約 8 名 ▶実証終了後 2023 年 12 月～2024 年 9 月 月平均 約 4 回/約 11 名 ▶Facebook ページにて様子を公開 https://www.facebook.com/fujimimaas/ ▶参加者のほとんどが高齢者であるが、音楽会や焼き芋などイベントの内容によっては親子連れや障害者の方、またそのご家族なども参加。 ▶2025 年 03 月以降、合同会社つくえラボのみんなの居場所事業の一部を協力団体へ移管し、週 1 回程度のペースの居場所づくりを維持できるよう体制を再構築。 <p>2. 外出支援サービス（合同会社つくえラボのおつきそい人事業）に関する段階的な料金改定（2023 年 09 月 1.5 倍/2025 年 03 月 2 倍）後の利用者のサービス利用継続状況を調査。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶対象期間の稼働実績 569 回（2022 年 07 月～2025 年 03 月） ▶値上げ後も契約を見送った人は 0 人。このことから、外出支援サービスへのニーズと期待、また、事業化の可能性を感じた。 <p>3. 養護学校向け遠足、宿泊学習の受け入れ（当事者の居場所づくり）教職員や医療従事者、保護者および生徒向けの事前案内（体験）から当日受け入れを一貫して行い、安心して外出ができる仕組みづくりを行なった。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>令和 4 年度</td> <td>6 校（回）</td> <td>224 名</td> </tr> <tr> <td>令和 5 年度</td> <td>9 校（回）</td> <td>261 名</td> </tr> <tr> <td>令和 6 年度</td> <td>16 校（回）</td> <td>471 名</td> </tr> </table>	令和 4 年度	6 校（回）	224 名	令和 5 年度	9 校（回）	261 名	令和 6 年度	16 校（回）	471 名
令和 4 年度	6 校（回）	224 名								
令和 5 年度	9 校（回）	261 名								
令和 6 年度	16 校（回）	471 名								

～居場所としてのイメージ～

養護学校以外での野外活動について教職員や医療従事者、保護者と体験を共有することで、在学中や卒業後に家族と行ける居場所をつくる。

- ・ 障害者支援団体向け遠足、宿泊の受入れ

令和4年度 3団体 71名

令和5年度 3団体 65名

令和6年度 13団体 450名

～居場所としてのイメージ～

グループ内の障害者と共に外出するための目的づくりと不安の軽減を同時に行い、継続的に訪問できる場所づくりを目指す。

- ・ 学生団体、支援団体向け障害者接遇研修の受入れ

令和4年度 3団体 75名

令和5年度 5団体 102名

令和6年度 8団体 394名

～居場所としてのイメージ～

公園等において障害者と居合わせた場合の配慮や、同行時の接遇方法について障害当事者講師と共に体験。場所や時間を気軽に共有できる居場所づくりを目指した。

(イベント)

- ・ 硫黄岳登山 (チャレンジ絆プロジェクト)

障害者接遇研修に参加した当事者と医療従事者が参加し八ヶ岳登山を目指すプロジェクト。新聞等の報道を通し、障害者が野外活動にチャレンジすることが否定されない環境づくりを目指した。

- ・ 障害者とチャレンジフェア

ふじみMaaSの活動を報告すると共にパーソナルモビリティ体験を通し障害当事者と健常者が共に楽しむことが出来る場所づくりを行った。障害者自身の言葉でテレビ番組において思いを伝える機会を作ることが出来た。

養護学校や支援団体、地区社協担当者に対しては事前下見の際のパーソナルモビリティ操作講習やトイレ休憩所等の確認など時間をかけ行なうことで、イベント本番に向けての不安が解消され、本番時もスムーズな進行が可能となった。

4. 縄文ハロウィン

2023年および2024年、富士見町で開催された縄文ハロウィンにおいて、移動の実証実験を行なった。町内のイベント会場間をデマンド便とシャトル便で運航し、移動を支援するものである(デマンド便は事前予約制)。2023年はデマンド便にのべ16

	名、2024年はデマンド便に5名、シャトル便に78名が利用した。
--	----------------------------------

2. 移動手段・居場所一体型のイベント・個別外出支援の企画運営のためガイドラインづくりと運用

指標	イベント・個別外出支援にかかる情報のデータベースの件数（開催概要・スタッフの人数・参加者の満足度、等）、データベースを基にしたイベント企画運営のためガイドラインを制作・運用する
初期値	ゼロ、ガイドラインなし
目標値	データベース 150 件、ガイドラインを活用したイベントの開催
実績値	<p>▶実証イベントデータ 135 件、個別外出支援稼働実績データ 252 件</p> <p>▶魅力的な居場所づくり（移動手段・居場所一体型のイベント）に関するデータベースの例</p> <ul style="list-style-type: none"> -収集期間 2022 年 7 月～2023 年 11 月 -みんなの居場所づくりに関する 67 件 <p>▶ガイドラインを作成、協力団体と共有</p>

3. ボランティア（送迎・見守り・同乗支援）人材の発掘とシェアリングの仕組み

指標	ボランティアの確保、人材発掘の機会創出、1人のボランティアが複数のイベントに定期的に参加する
初期値	なし
目標値	送迎・見守りボランティア 50 名、各講座（元気リーダー、認知症サポーター、運転講習会、等）を社協と共同開催、ボランティア（候補者含む）が構成団体だけでなく協力団体主催・共催イベントに参加（月に1回程度）
実績値	<p>送迎・見守りボランティア 13 名</p> <p>▶他事業でかかわった方、元気づくりリーダー講座の受講者、町社協インターン生、地元高校の総合学習で生徒受け入れるなどした。</p> <p>-居場所と移動手段が一体型のイベントを開催して、そこに上記の方々に参加してもらうことでボランティアの実践の機会とし、その中から継続してボランティアとして参加してくれそうな人に声をかけた。参加者としてイベントに参加した人の中から、個別で声をかけて次のイベントにボランティアとして関わってくれる人を増やしていった。</p> <p>当初は自主的な参加を期待していたが、期待していたアクティブシニア層のライフスタイルの変化及びこれまで協力してくれていたボランティアの方の高齢化を背景に、実際は上記のように増や</p>

	<p>していくほうが適性或定着率がよく成果があった。結果として、ボランティア（候補者含む）が構成団体だけでなく協力団体主催・共催イベントに参加（月に1回程度）してくれたり、えんがわ・オレンジカフェに支援者として（2団体・ボランティア4名・月4回程度）参加してくれるようになった。</p> <p>▶従業員向け研修会の実施、通常サービスでの対応範囲を拡幅外部団体（障害者支援）との連携を強化した</p>
--	---

4. 居場所となる拠点に関する情報の見える化

指標	拠点ごとの設備・環境、イベント、アクセス方法、等の情報へのリーチ状況
初期値	このようなシステムはなかった
目標値	拠点ごとの設備・環境、イベント、アクセス方法、等の情報に誰もがリーチできる
実績値	LINE アプリを開発し、LINE アプリから拠点ごとの設備・環境、アクセス方法等を確認できるようになった。（p19-21 別紙アプリの概要）

5. 空き車両のシェアリングの仕組み

指標	シェアできる空き車両の種類・数、シェア可能な空き車両の利用（稼働状況の確認、予約・キャンセル、等）の簡便さ、空き車両の管理システムの利用状況、公共交通機関の運行情報の確認状況
初期値	このようなシステムはなかった
目標値	社協車5台、富士見高原リゾート車両1台、民間人の車両5台、空き車両の稼働状況の確認、予約・キャンセル等がシステム管理できている、一部協力団体も管理システムを利用できる、交通機関の運行情報を管理システムに組み込むため、関係機関へ提案。
実績値	LINE アプリから空き車両の台数、利用方法や問い合わせ先、公共交通機関の利用方法もわかるようになった。富士見高原リゾートではイベントを中心に事前予約によりマイクロバスを確保している。イベント（地域活動）支援。（p19-21 別紙 アプリの概要）

6. 介助者の負担減を目的とした、屋外アクティビティにおける移動補助具の実用化

指標	イベントや外出支援の際にパーソナルモビリティやその他必要な
----	-------------------------------

	補助具の利用状況
初期値	介助が必要なモビリティしかなかった（電動のものはなかった）
目標値	屋外アクティビティに利用できるパーソナルモビリティの実用化に向けてメーカーへ製品化や仕様改善を提案、大型公園での貸し出し、スポーツイベント等での貸し出しを提案、その他補助具を実際のイベントや外出支援の際に誰もが利用できる。
実績値	電動のもの3台（休眠預金を活用して導入したのは2台）で富士見高原リゾートの管理施設内での貸出しを実施。町内イベントにおける貸出しおよび体験会を実施している。LINEアプリから、パーソナルモビリティの種類や台数、利用方法等がわかる。（P19～P21、別紙 アプリの概要） イーエムアイ・ラボは、歩行が困難な人が自分で操作して移動ができるよう、パーソナルモビリティ2台の開発および実証を行った。（p15～p18 別紙 パーソナルモビリティの概要）

7. 居場所・移動手段・見守りスタッフのマッチングの仕組み

指標	居場所・移動手段・見守りスタッフのマッチングの簡便さ
初期値	このようなシステムはなかった
目標値	それぞれを効率よく割り当てられるシステム構築のための要件定義が完了
実績値	LINEアプリからイベントに参加したり、居場所（拠点情報）・移動手段の情報を得ることができる。  <p>スクリーンショットは「ふじみMeas」アプリのインターフェースを示しています。左側には「富士見町地域共生センターふらっと」の建物写真と概要、バリアフリー情報（駐車スペース、トイレ、エレベーターなど）が記載されています。中央には「イベント申し込みリスト」があり、「プライバシーポリシー」、「空き車両の紹介と利用について」、「施設MAPの確認と最速ルート検索」の項目があります。右側には「ふじみまち終活講座」の告知があり、日付（2025年03月08日）と時間（13:30-15:00）が明記されています。</p>
	<p>ラインアプリを活用してマッチングを行なった取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 縄文ハロウィン（2023年10月21日） ・ 家族介護者交流会（2024年1月27日） ・ 冬のワーケーション（2024年2月10-11日）

	<ul style="list-style-type: none"> ・ネイチャーポジティブ（2024年3月9日） ・縄文ハロウィン（2024年10月19日） ・つくえラボ・音楽会（2025年1・2月） ・富士見町社協（2025年3月8日） ・ユースセンター（2025年3月10日） <p>(p19-21)</p>
--	--

8. 既存サービスとの連携ネットワーク構築

指標	既存サービス事業者との定期的な意見交換の機会創出
初期値	これまでは参加していなかった
目標値	デマンド交通運行委員会への出席（年2回）、その他、関連会議・ミーティングを開催（月1回程度）
実績値	<ul style="list-style-type: none"> ・デマンド交通運行委員会への出席（年2回） ▶2024年2月8日出席：ふじみ MaaS の取り組みについて説明 ▶2024年4月1日出席：利用者減少の原因についてヒアリングの実施を提案 ▶2024年9月24日出席：ヒアリング結果を受け、利用者を増やすための提案を実施（GPSによるデマンドバスの位置情報の見える化、おつきそい人、等） ・町社協とイベント企画や利用者の情報共有ための打ち合わせを（月1回） ・移動支援協議体会議（2023年4月、2025年3月年） ・その他、関連会議・ミーティングを開催（月1回程度） ・特別支援学校、県福祉部、観光機構等と連携、モビリティ活用や居場所づくりについて事例紹介を行なった。 ・富士見町役場産業課担当者との定期的なミーティングを開催（月1～2回） ・2025年1月：富士見町商工会へすずらん号の位置情報をLINEアプリでの見える化の提案を行なう。また、すずらん号の利用促進のため、利用方法をLINEアプリで発信する取り組みを行なった。 ・富士見町社協の公式LINEを試験的に立ち上げ、イベント予約機能を実装提供とサポートを行なう。25年3月にイベントを実施、夏の子供向けサマーチャレンジイベントなどで活用予定、ヒアリングを実施。 ・ユースセンターの公式LINE（既存）にイベント予約機能を実装提供。25年3月のイベント（大学生向け）で予約と社協車両を利用する送迎サービスを実証。

「6. 介助者の負担減を目的とした、屋外アクティビティにおける移動補助具の実用化」に係る屋外アクティビティにおける歩行補助具の最適化のための検証

○モバイルエックス：折り畳み可能な電動車いす



- ・ 自転車に似た操作であり、初めて電動車いすを利用する高齢者でも容易に利用することが出来た。持ち運びが容易な点は養護学校等での事前学習でも活用可能であり、遠足等外出への障壁を軽減すること（行きやすい環境づくり）が可能となった。（養護生徒の習熟度、教員および医療従事者の事前準備）
- ・ JINRIKI 等介助の必要なアウトドア用車いすと異なり、乗員が自身で操作することが可能なため、乗員の意志で行先を選択可能であり、また同行者の負担も軽減することが出来た。

○パラモーション：不整地利用が可能な電動車いす



- ・モバイルエックスよりも走破性や安定性が高い。
- ・重量が重い為、域外での活用が難しい（運搬可能な車両が必要）
- ・ジョイスティック操作は慣れが必要であるが、養護学校学生が体験することにより生徒が購入する車いす選定の参考にできた。

2 種類の電動車いすはアウトドア用車いすと合わせ利用者や同行者に紹介。散策等屋外活動時に体験いただいた。杖の利用者等、立てるが長い距離歩けない利用者にとっては野外活動の選択肢を増やすことになる。今後も富士見高原での体験機会の提供や富士見町内イベントにおいて歩行弱者への合理的配慮の提供提案を続けたい。

富士見町内での体験にあたっては、歩道に段差が多く街中での利用は難易度が高いと感じた。ショッピングセンター（西友）においては店内侵入が難しいセニアカー（サイズ、重量により店内で使えない）に代わる移動手段になりえる。富士見町の公園（夢ひろば）では体験会開催後、芝生養生と他利用者の安全確保の観点から園内へのパーソナルモビリティの乗り入れが制限されることとなった。

【参考】その他 富士見高原のパーソナルモビリティの現状

- ・天空カート（自動運行のパークモビリティ） 50 台運用
標高差 200mを自動運行にて運営 高齢者、障害者の外出活動にて利用カートへの移乗が必要だが、同行者の負担少なく体験が可能
- ・ジンリキ（けん引式車いす補助装置付き屋外用車いす・要介助）10 台運用
リヤカーや人力車のように引く、押すことが可能で悪路の走破性も高く、操作がわかりやすい。天空カートで登った創造の森はこのジンリキで散策を行う。
- ・ヒッポ（屋外用 3 輪車いす・要介助） 5 台運用
ジンリキよりも走破性が高い車いす。登山などより段差が多い場合に活用する。ジンリキと比べ取り扱いに習熟が必要。
- ・バイスキー、デュアルスキー（雪上滑走用車いす・要介助） 2 台運用
スキー教室を中心に活用。障害者や傷病者の雪上体験が可能になる。

【エピソード】

居場所づくりやモビリティ体験から始まった取り組みでは呼吸器と車いすを使う高齢者（69 歳ギランバレー症候群、間質性肺炎）と共に八ヶ岳の硫黄岳に登頂することが出来た。この様子は新聞や長野県観光機構の HP、NHK ニュースなどでも紹介された。（当事者は 2025 年 2 月に他界した）

「6. 介助者の負担減を目的とした、屋外アクティビティにおける移動補助具の実用化」に係るパーソナルモビリティ及び車椅子の電動アシスト機構の開発等

電動車椅子よりも軽量で、安全機能（位置情報の把握と衝突防止）が搭載可能なパーソナルモビリティを開発した。さまざまなシチュエーションでの利用を想定して、屋外用と室内用の2種類のパーソナルモビリティを製造した。

2種類のパーソナルモビリティは箕輪町や長野市のイベントで試乗試験をしたほか、2024年の縄文ハロウィンでも来場者に試乗していただいた。箕輪町では28組、長野市では13組が試乗した。利用者それぞれ5組に対して、試乗時にヒアリングを実施した。いずれも肯定的な意見がほとんどであり、バッテリーの稼働時間、メンテナンスの方法、故障時の対応、販売価格などの質問があった。また、すぐに欲しいという声が4名からあった。富士見町の縄文ハロウィン（2024年10月19日）では、パーソナルモビリティの体験会を行なった。14名のかたに試乗していただいた。傾斜地でも利用できること、音が静かであること、車体が軽いことが好評であった。富士見町では道路や歩道が狭いこと、舗装されていない場所が多いことから、いますぐに使いたいというよりは、何年か後の利用を考えているという意見もあった。位置情報や衝突防止などの見守り機能は歓迎されていた。

今後、事業化として、町内の施設等への貸し出しや、同様の機構でパーソナルモビリティを開発希望の団体への技術提供を考えている。町内の施設等への貸し出しは24年12月から25年1月に打診したが、タイミングが合わず実施できなかった。町内の施設等と調整しつつ、町外のイベントへの貸し出しも含めて進めていきたい。町内の公の場でのパーソナルモビリティの利用は、まだ多くの制約があるのが実情である。そのため、車椅子電動アシスト機構のほうがニーズがある可能性がある。



車椅子の電動アシスト機構

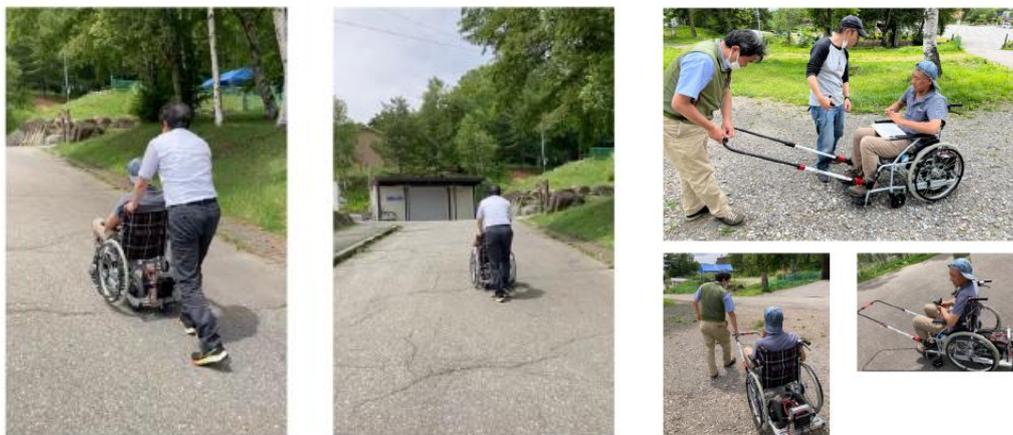
パーソナルモビリティとは別に、既存の車椅子に装着して使用する、電動アシスト機構の開発も行なった。介助者の負担減や屋外アクティビティにおける移動補助具の実用化を目指したものである。車体の制御はジョイスティックで、介助者および利用者の双方が操作をすることが可能である。

下図のプロトタイプでサイズや出力、取り扱い方法を検討し、アシスト機構の改良を行なった。その後、町外の福祉施設関係者や特別養護老人ホームでの体験会を実施した（2023年7月26日・8月22日）。





富士見高原リゾートにおいて、屋外（アスファルトの登り、砂利や土などの起伏のある場所）での試乗試験を実施した（2023年7月7日・18日）。ジンリキと併用して使用することで、介助者の負担はより軽減される。



【エピソード】*予期せぬアウトカム

本事業のなかで開発をした車椅子電動アシスト機構をさらに小型化・軽量化することを目的に、第114回（令和6年度第2次）新技術開発助成（市村清新技術財団）に応募し、採択された。25年4月より、小型化・軽量化に取り組む予定。車椅子電動アシスト機構は、2024年に特許申請済み。

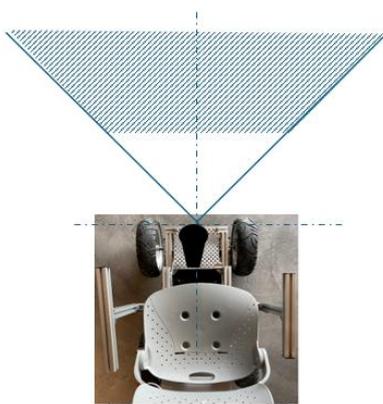
位置情報の把握

パーソナルモビリティにGPS機器を搭載することで、アプリから現在地を把握することができる。このシステムは車両の位置情報を把握することも可能であり、さまざまな移動体に搭載し、利用することができるのが利点である。2024年の縄文ハロウィンの実証ではシャトル便2台に搭載し、LINEアプリで現在地がわかるようにした。



衝突防止機能

衝突防止機能は、検知範囲に障害物がある場合は音を発して利用者に危険を伝えるというもの。この検知機は取り外しが可能であり、ほかのパーソナルモビリティにも搭載ができる。害物を検知するとモーターが停止する機能も検討したが、停止後にシステムを回復するためには技術的に解決すべき課題が多いため、今回は障害物の存在を利用者に気づかせる音を採用した。



検知範囲：
 正面 45 度の範囲かつ、
 0.5～1.0mの距離の中で 10cm 程度の物体
 ※物体サイズは、概算

グを行ない、技術提供をしてもらうことで開発の時間を大幅に短縮することができた。

イベント主催者は申し込み状況をキントーンで確認・管理できることから、常に最新の状況を把握できる。受付時のミスがほぼなくなり、担当者が急に変更になってもイベント開催に大きな影響はないと考えられる。

Record number	id	name	date	location	details	locations_id
5	5	event5	2023年11月24日	場所5	イベント5の詳細はこちら	1
4	4	イベント4	2023年11月24日	場所4	イベント4の詳細はこちら	1
3	3	イベント3	2023年11月24日	場所3	イベント3の詳細はこちら	2
2	2	イベント2	2023年11月23日	場所2	イベント2の詳細はこちら	2
1	1	イベント1	2023年11月22日	場所1	イベント1の詳細はこちら	2

団体ごとにLINEアプリを提供し、そこにふじみ MaaS 機能を搭載した。施設情報、空き車両やデマンドバスすずらん号の利用方法等は統一の項目であるため、どのアプリからでも閲覧できる。



アプリの利用者からは、年配の人でも使える、操作（申込み）はしやすく簡単、いまはラインを使っていない人がいるけど、富士見町からの案内もLINEで来る時代になった。アプリの画面で申込み内容を確認できるのは良いという感想があった。また、アプリは利用しやすく、動作性もあまりストレスにはなら

なかったが、申し込みから当日までどう使ったらいいのか、今のUIのままだとわかりづらい部分があった。ニーズはあり、イベントまで自力で来られない人がいるので、そのかたが気軽に利用できるシステムになればとても便利だと思ったという感想が寄せられた。

このような仕組みがあるお陰で、イベントを企画するハードルが下がったと見受けられるケースがあった。一方、便利だけれどいまは必要ではないという意見もあった。予約という仕組みで募集しても集まらない場合があった。しかし、現在の利用者ではなく、つぎの世代を見越して5年後10年後の利用者に向けたLINEアプリという位置づけで、外出支援に関わるイベント実施できると、地域の活性化に繋がると考えられる。そのための普及事業が必要となる。LINEアプリを使ってすぐに予約をするのではなく、まずはLINEアプリから情報を得て、段階的に利用の方法を変えていくほうが良いかもしれない。

活動報告会

2025年3月21日、富士見町社協が主催する「移動支援を考える会議」の終了後、ふじみMaaS協議会の3年間の活動報告を行なった。参加者は富士見町社協、富士見町役場介護高齢者係、富士見町役場工業交通係、富士見町地域包括支援センター、ひなたぼっこ友の会、富士見町商工会、アルピコタクシー株式会社であった。本事業で実施した、移動手段・居場所一体型のイベント・個別外出支援、居場所となる拠点に関する情報の見える化、介助者の負担減を目的とした屋外アクティビティにおける移動補助具の実用化について紹介した。



人 材	事業責任者 1 名、居場所づくり企画運営 2 名、モビリティ企画・運営 3 名、機器改造・システム開発 2 名、経理担当者 2 名
資機材	PC、モニター、電動車いす（パラモーション、他 1 台）、ノーパンク車いす、モバイル X（折り畳み式セニアカー）、他

経費	事業費総額	直接事業費	管理的経費	評価関連経費	自己資金
契約当初の計画金額（円）	30,026,400	25,658,800	1,309,200	1,258,400	1,800,000
実際に投入した金額（円）	23,247,152	20,609,314	711,348	126,490	1,800,000

(2025 年 3 月 31 日時点)

6. アウトカムの分析

1. 高齢者・障がい者・子供の社会参加の機会創出

- ① 普段利用する移動手段、外出頻度、各プログラムについての認知・満足度、要望等をアンケート・インタビューにて調査

初期値／初期状態

移動手段がないことにより外出制限されている、自主的な移動手段の選択肢が少ない、外出の意欲がない、各種居場所の存在を知らない。

【高齢者】

アウトカム発現状況（実績）

顕在・潜在的サービス利用者向け及び支援者向けのアンケートを 8 回実施し、延べ 299 件の回答を回収。

実施時期	対象	回答数	調査内容	備考
2022年9月	支援者	56	余暇活動に関する外出支援サービスの現状	
2022年9月	利用者	133	外出について	デイサービス、サロン
2023年9月	利用者	9	利用者満足度	えんがわ参加者
2023年9月	支援者	21	外出支援サービスの現状	
2024年1月	潜在的利用者	17	外出について	個別訪問
2024年10月	利用者	7	利用者満足度	えんがわ参加者
2024年10月	利用者	15	利用者満足度	音楽会参加者
2025年1月	支援者	11	外出支援サービスの現状	
2025年1月	潜在的利用者	30	外出について	サロン

合同会社つくえラボのみんなの居場所事業のスキームを活用し、7 つの協力団体及び地域の人たちと一緒に、移動手段・居場所一体型イベントを 67 回（月

4 回開催・平均参加者.8.4 人) 実施。魅力的な居場所に関する要件や適切な活動内容、企画・運営フローなどを調査。延べ 562 名が参加し、内、常連の方約 10 名にアンケート・ヒアリングをおこない、活動の評価を行なった。

・外出の意欲・頻度が向上

▶高齢者：2024 年 10 月に実証イベントの参加者にアンケートを実施

イベントを楽しみにしている、お楽しみのための外出の機会になっている、生活に張り合いが出るようになった、もっと出かけたいと思うようになったという意見を多くいただいた。

▶参加者の変化など

・【A さんの例】

これまで、加齢や疾病により身体・認知機能の低下し、免許を返納せざるを得なくなった高齢者の日中の外出先はそのほとんどが「デイサービス」のみであった。A さんはデイサービスは行きたくないとおっしゃっており、日中の行き先がなく困っていたが、みんなの居場所ができたことで、必ず参加してくれるようになった。歩行に不安があったが、「見守りの人がいるので安心」と、頑張っ

てハイキングなども参加してくれた。A さんは最終的に入所することになったが、できれば入所先に遊びに行く、入所先から遊びにきてもらうなどをみんなの居場所の企画としてできたらと考えている。

・【B さんの例】

要支援がついたのと免許返納時期がかさなり、みんなの居場所に参加するようになった。デイサービスの利用回数には限りがあったが、みんなの居場所は制限なく参加可能なため、気軽に定期的に出かけてもらえるようになった。入院などで一時的に来れなくなっても、退院後にまた来てもらうことを励みにリハビリを頑張ってもらうなど、日々のモチベーションにもつながった。退院後もおつきそい人サービスを併用するなどして、積極的に外出できるようになるまで回復。

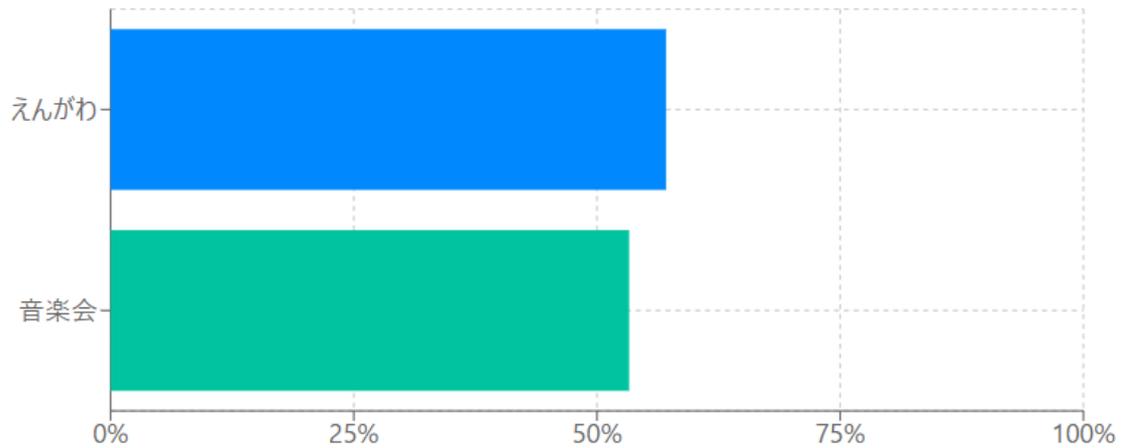
・自己肯定感の向上

自己肯定感に関する直接的なアンケートは実施していないが、複数の項目から一定の効果を推測できる。

▶高齢者：2024 年 10 月に実証イベントの参加者にアンケートを実施

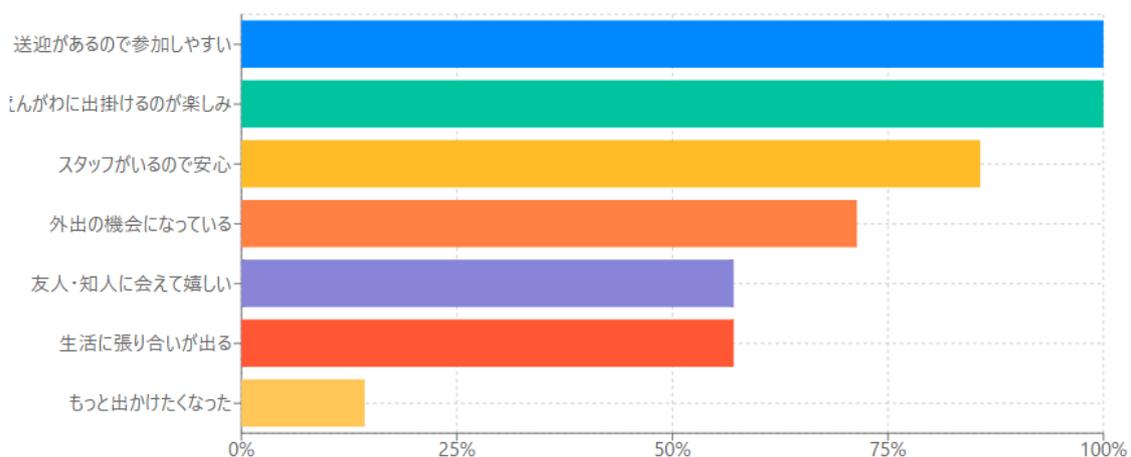
・えんがわと音楽会の両方で、約 55%の回答者が「生活に張り合いが出る」と回答。外出や活動への参加が生きがい創出に寄与していることを示唆。友人・知人との交流と生活の張り合いに正の相関が見られる。こうした活動が孤立防止や精神的健康維持に貢献している可能性が高い。

イベント別「生活に張り合いが出る」と回答した割合



「もっと出かけたと思うようになった」という回答（えんがわ 14.3%、音楽会 20.0%）は、自分にもまだできることがあるという自己効力感に関連。特に音楽会では「毎月根本先生のピアノ演奏を聴くのが楽しみ」が 86.7%と高く、文化的活動の享受が自己肯定感に好影響を与えている可能性がある。自己肯定感は特に高齢期において、孤立防止や精神的健康の維持に重要な役割を果たすため、こうしたイベントが自己肯定感に与える影響を明確に測定することは、プログラムの価値をさらに明確にする上で有意義と考えられる。

えんがわ参加者の参加効果（複数回答）



・高齢者の介護予防、健康寿命が延びる

➤高齢者：2024年10月に実証イベントの参加者にアンケートを実施

定量的な数値は得られなかったが、アンケート結果からイベント参加（外出）と介護予防・健康寿命の延伸について下記の通り考察。

イベント参加が持つ多面的な効果は、厚生労働省が推進する「介護予防の3要素」（運動、栄養、社会参加）のうち、特に社会参加の側面を強く支えています。さらに、WHO（世界保健機関）が提唱する健康の定義「身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態」の全ての側面に良い影響を与える可能性がある。

特に注目すべきは、こうした活動が「単一の効果」ではなく「複合的な効果」をもたらしている点。身体活動、認知刺激、社会交流、心理的ウェルビーイングなど、多面的なアプローチが総合的に健康寿命の延伸に寄与すると考えられる。

介護予防の3要素に対応するアンケート項目

運動機能向上



栄養改善



社会参加



② 参加したプログラムの満足度等をアンケート・インタビューにて調査
外出の自主性・自立性をアンケートにて調査する

初期値／初期状態

（被介護者・子供）遠慮して出かけるのを控えてしまう（介助者・保護者）送迎や現地での介助が大変

【高齢者】

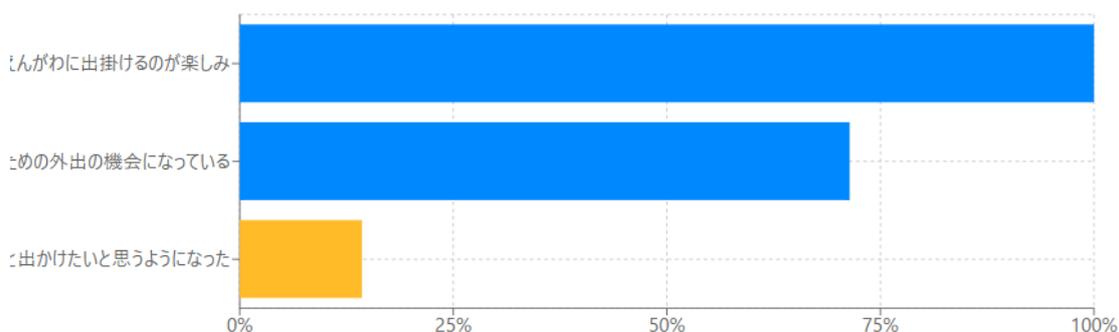
アウトカム発現状況（実績）

・外出の意欲・頻度が向上

➤高齢者：2024年10月に実証イベントの参加者にアンケートを実施

イベントに出かけるのが楽しみ、もっと出かけたいと思うようになったという意見を多くいただいた。これらのイベントは単なる楽しみの提供以上に、参加者の外出意欲を高め、定期的な外出習慣を形成することで、総合的な健康維持に貢献していると言える。

えんがわ参加による外出意欲の変化



2. 被介護者や子供とその介護者や保護者が自主的に気軽に外出できるようになる

介護者へ負担軽減についてアンケートを実施（2025年1月）

定量的な数値は得られなかったが、アンケート結果からえんがわや音楽会などのイベントに参加することが、介護負担軽減に与える影響を考察。

こうしたイベントは、以下の3つの側面から介護負担の軽減に貢献していると考えられる。

1. 介護者へのレスパイト（休息）機会の提供
2. 被介護者の機能維持・心身健康の促進
3. 適切な社会資源への接続機会の創出

以下、考察。

○アンケートデータからの示唆

現在のアンケートでは介護負担に直接言及する質問項目は少ない、間接的に以下の点から考察できる。

送迎サービスの効果： えんがわでは100%が「送迎があるので参加しやすい」と回答

定期的な外出機会： 「お楽しみのための外出の機会になっている」（えんがわ 71.4%、音楽会 66.7%）

スタッフの存在： 「社協やつくえラボのスタッフがいるので安心」（えんがわ 85.7%、音楽会 66.7%）

○介護負担軽減につながる要素

a) レスパイトケア（介護者の休息）機能

えんがわや音楽会は、在宅介護をしている家族にとって一時的な休息時間を提供する。

イベント参加中（2～3 時間程度）は専門スタッフが見守るため、介護者は自分の時間を持てる。

定期的開催されることで、介護者が予定を立てやすく、精神的余裕を生み出せる。

送迎サービスにより、移動の負担が軽減され、介護者の労力や時間の節約になる。

b) 被介護者の機能維持・向上

これらのイベントは参加者の機能維持に貢献し、間接的に介護負担を軽減する：

社会交流による認知機能の刺激（認知症進行予防）

外出による身体活動の促進（ADL・IADL の維持）

生活リズムの維持（昼夜逆転の防止、規則的な生活の促進）

c) 専門的サポートへのアクセス

イベント参加は地域の専門的サポートとの接点を作る：

社協スタッフとの定期的接触で、新たな福祉サービス情報を得られる

困りごとの早期相談機会となり、問題の深刻化を防止できる

同様の状況にある他の参加者から、介護のノウハウや地域資源の情報を得られる

○ 経済的観点からの介護負担軽減

予防的介入としてのコスト効果

健康維持により、医療・介護サービス利用の減少や遅延が期待できる

一人あたりのイベント運営コストは、施設介護費用と比較して低コスト

早期の社会参加による健康状態維持は、将来的な高額介護費用の抑制につながる

・体験活動が居場所（拠り所）になり卒業後の進路を前向きに考えられるようになった。（特別支援学校高校生）

・娘と休みにいられる場所がそもそも無かった。受け入れてくれるだけでうれしい（障害者保護者）

・重度身体障害者や医療的ケア児童の送迎利用については学校発着を除き、マ

マイクロバス等の利用が難しい傾向にあった。当事業によりマイクロバスにチャイルドシートを固定するなど教員や保護者、医療関係者と工夫できる時間を作ることが出来たため、移乗による乗車を検討できるようになった。

・送迎があるため、目的地がバスや電車の路線外でも参加できて良かった。送迎支援があることで、選択肢が増えるし、イベントに参加する機会も増えると思う（24年3月：中学生2名へのヒアリング）。

・4名中3名が、普段の生活で今回のような移動手段があれば使いたいと回答。金額については無料が良いが、有料の場合は300円なら使うが1名。利用して良かった点は、歩かなくても良いからという意見があった（24年10月：小学生4名へのアンケート調査（シャトル便を使用））。

3. 生活だけでなく楽しみのために既存の公共交通機関や民間サービスを利用することへの抵抗感軽減

アンケート・インタビューにて受益者の意識・行動の変容を調査

初期値／初期状態

娯楽や楽しみのために民間サービスを使うことに抵抗を感じる。社協車貸出や公共交通（福祉輸送・タクシー・すずらん号）の認知度・利用頻度が低い。

【高齢者】

アウトカム発現状況

- ・娯楽や楽しみのために積極的民間サービスを使いたいと思うようになる
 - ▶有料イベントに参加したいかをアンケートで調査（2025年1月）

イベント参加費（1000円前後）に対する意向調査

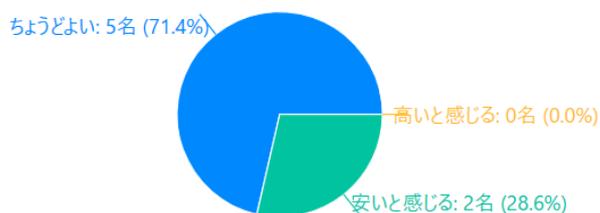
問：イベントについて参加費（1000円前後）がかかる場合、参加したいと思いますか。この参加費は企画・運営、車がない人の送迎、お手伝いが必要な人のための見守りスタッフ、行事保険代に係る経費に充当。肯定的な回答が多数。

- ・「参加したい」と回答した人が62.5%（15名）と過半数を占めている。
- ・これは、1000円前後の参加費に対して抵抗感が少ないことを示している。

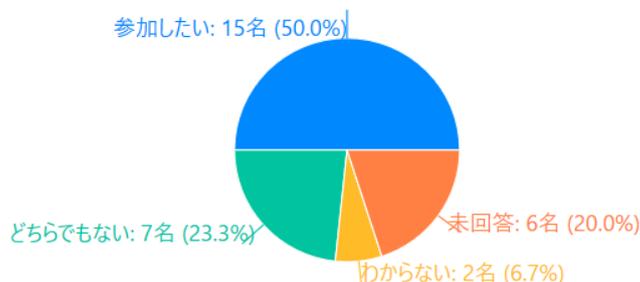
利用者の参加費に関する意向

移動手段＋居場所のイベントに参加してくれ方と参加していない方で価格に関する意識調査を実施。参加者の満足度は高く、費用を支払うことについてほとんどの人が適正、もしくはお得に感じている。参加していない人については、年齢層の差もあるが、費用の支払いについて多少の抵抗はあるよう。また、参加した人のなかで参加費と参加人数の相関を図ったところ、相関係数-0.06。費用より、内容の満足度の方が参加者にとっては重要であることがわかる。民間の有料サービスとしての展開の可能性は高いと思われる。

【参加した人】80代以上で外出支援が必要な人
参加費は活動内容に合わせて無料～3000円程度に設定。



【参加していない人】60代以上で自立している層
有料イベント（1000円前後）への参加意向



【縄文ハロウィン（2024年）】

2024年の縄文ハロウィンでは、「縄文ハロウィンほこ天祭り」、J A「農業祭」、富士見高原病院「病院祭」、井戸尻考古館「収穫祭」が同日開催されることから、各お祭り会場を定時運行し当日予約なしで乗れるシャトル便を用意することとした。また、デマンド便は開発したLINEアプリによる予約システムを導入、LINEアプリではイベント（各お祭り）情報検索からイベント参加予約（デマンド便の予約）、LINEチャットで当日の連絡を一貫してアプリ内で行なえるようにした。

シャトル便の利用客は予想より多く、ポスターやチラシによりある程度認知されており、シャトルがあるからお祭りに来たという人も一定数いた。シャトル便の途中停留所での停車時間が5分～10分と長かったため、各間5分短くしても良い。シャトル便ルート沿線に停留所を増やすことも検討したい。一方でデマンド便は予約期間を延長して対応したが、利用者は少なかった。予約が障害になっているか、行き帰りの時間が制限されていることが障害になっているのだろうか。実際に当日午後天候が悪くなり、予定していた帰り便より早く帰宅したいということで1組は帰り便をキャンセルし、もう1組はデマンド便の予定時刻を繰り上げて対応した。お祭りイベントへの参加という性格上、事前に予定を立てる人は少なく当日の予定や気分で参加する人が多いため、デマ

ンド便は予約なしで当日タクシーのように利用してもらう方法が適しているかもしれない。以下に、アンケートを示す。

アンケート回答数：35名

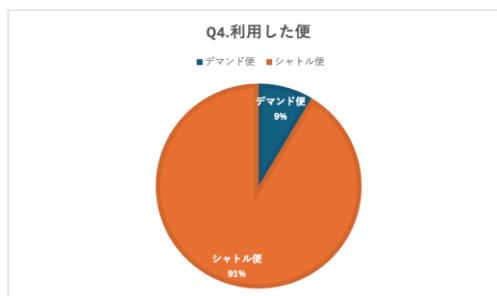
1. 性別 男 女 答えない

2. 年齢層 小学生 中学生・高校生 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代 90代 答えない その他

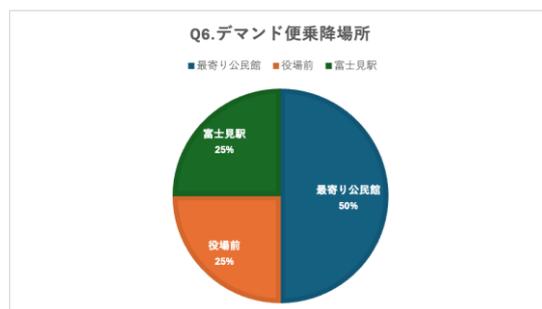


3. 普段の移動手段は何ですか？ 自分が運転する車 家族が運転する車 自転車 徒歩 その他

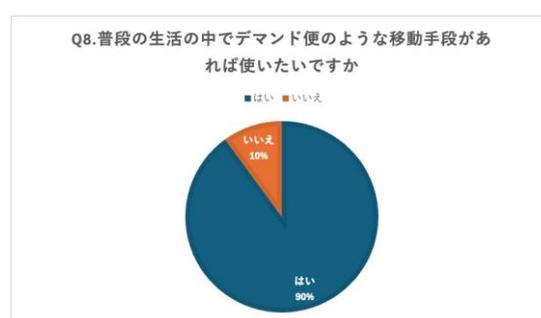
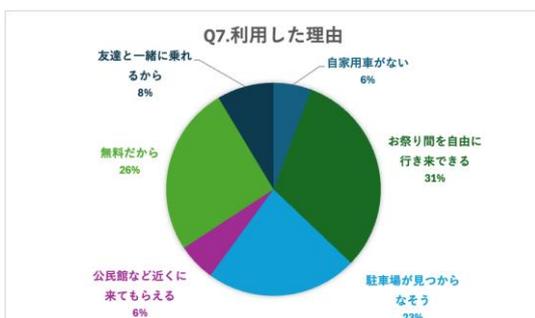
4. 今回利用した便はどれですか？ デマンド便 周遊シャトル便



5. 周遊シャトル便を利用した方にお聞きします。乗った場所（○をつけてください）と降りた場所（☑をつけてください）はどこですか？ 富士見駅 役場前 信濃境駅 井戸尻考古館
6. デマンド便を利用した方にお聞きします。乗った場所（○をつけてください）と降りた場所（☑をつけてください）はどこですか？ 最寄り公民館 役場前 富士見駅

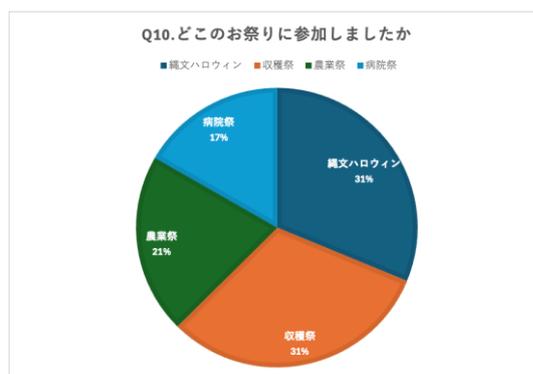
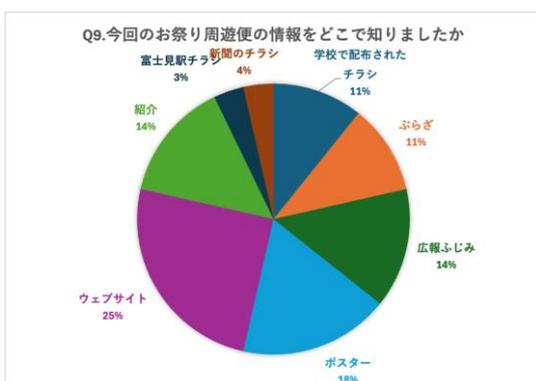


7. 今回なぜデマンド便を使おうと思いましたか？（複数選択可）
 自家用車がない 送迎してもらえない
 お祭りの間を自由に行き来できるから 駐車場が見つからなさそうだから 公民館など近くまで来てもらえるから
 無料だから 友達と一緒に乗れるから
8. 普段の生活の中でシャトル便、デマンド便のような移動手段があれば使いたいですか？
 はい いいえ その理由は何ですか？



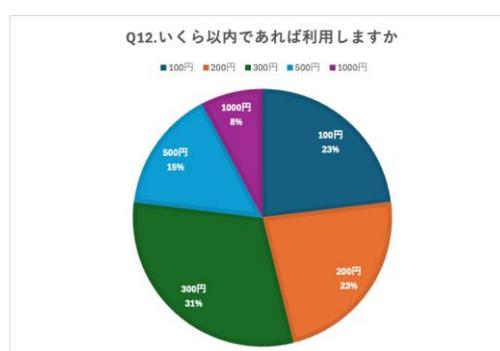
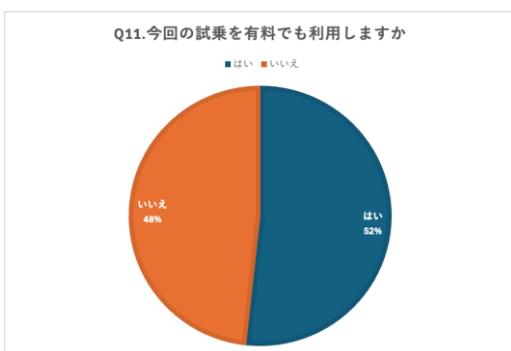
9. 今回のお祭り周遊便の情報はどこで知りましたか？（複数選択可）学校で配布されたチラシ ふらぎでのチラシ 広報ふじみ ポスター ウェブサイト これ以外

10. どのお祭りに参加しましたか？（複数選択可）縄文ハロウィンホコ天祭り 高原の縄文王国収穫祭 JA 農業祭 病院祭



11. 今回の試乗を、有料でも利用しますか？ はい いいえ

12. 「はい」と答えた方にお聞きしますいくら以内であれば利用しますか？



アンケートからは、お祭り周遊便の実施により、運転の不安や駐車場の不安などを解消し、お祭りに参加する機会を作ることができたと考えられた。お孫さんを連れてたおばあちゃんや、中学生が一人でシャトル便に乗りお祭りに参加しており、アンケート結果からも10代～80代の方まで偏りなく全世代が乗車していた。また、小さい子を連れての移動は大変なのでこのようなデマンドは助かります、免許返納をためらっている方にとって身近なサービスとなれば良い、一人で運転してくるのは不安だったのでバスがあつて良かった、などの感

想が寄せられた。

ふじみ秋のお祭り周遊便 2024.10.19(土)

◆デマンド便(完全事前予約制)
 車両: マイクロバス 定員20名
 ノア 定員7名
 シエンタ 定員5名

運行便:
 (行き便)
 最寄公民館→役場→関口→タリ→富士見駅
 ①9:50着 ②11:15着 ③12:45着
 (帰り便)
 富士見駅→役場→関口→タリ→最寄公民館
 ④13:15発 ⑤15:00発 ⑥16:30発

予約: 便名と乗降公民館を予約(各便定員30名)
 (LINE)受付期間: 9/1~10/12
 (電話)受付期間: 10/1~10/12
 *日曜日を除く 10:00~18:00
 →3日前に乗車時刻をLINE(電話)にて連絡

◆シャトル便(予約無し自由乗車)
 車両: ハイエース 定員9名
 運行時間: 10:00~15:00
 富士見駅→役場→関口→タリ→巨瀬墳墓→井戸尻考古館
 井戸尻考古館→巨瀬墳墓→役場→関口→タリ→富士見駅

主催: ふじみMaaS協議会
 富士見町社会福祉協議会

4. 分野横断的、内発的な協力体制が生まれる

ふじみMaaSをきっかけにどれくらい民・官民等の連携が生まれたかをイベントベースで分析・調査し、参加者の意識・行動の変容を調査する

初期値／初期状態

参加者が特定層に限られる(高齢者だけ、子どもだけ等)、それぞれの団体単独での主催のイベント開催がほとんど。

【誰でも(主に高齢者)】

アウトカム発現状況(実績)

- ・ほとんどのイベントに複数層の人たちが常時参加できる
- ・どのイベントも年齢、性別、障害の有無に変わらずどんな方でも参加可能

合同会社つくえラボのみんなの居場所事業のスキームを活用し、7つの協力団体(町社協、にじいろむじか、脳が目覚めるアート塾てらーと、すずの音カフェ、カゴメ野菜生活ファーム、ゲストハウス KARAI、道の駅信州葛木)及び地域の人たちと一緒に移動手段・居場所一体型イベントを67回(月4回開催・平均参加者.8.4人)実施。

【障害者】

- ・モビリティ体験会や事例紹介の場が増え、他地域からの視察も増える。
- ・音楽イベント等にてパーソナルモビリティの貸し出しを行なったことにより、

イベント実施における合理的配慮の提供が可能となった。

小松さん（障害当事者）

ふじみ MaaS の活動で中学生や高校生に向けて自身の体験を話す機会を得た。身体障害と弱視により自動車運転ができない為、送迎をしていただきありがたかった。（仕事では移送サービスが使えない為）他地域（北信）での体験にも参加し、自信の挑戦が他の障害者が外出できるきっかけになると感じた。今後も続けていきたい。

市川さん（支援者）

（養護学校で関わっていた）障害者の生徒たちとの外出先を探していた時にこの取り組み（ふじみ MaaS）を見つけた。参加する前は障害者の外出には、おむつ交換用のベッドや多目的手洗いが必須であると思っていたが、工夫次第でどうにでもなるということが分かった。医療的ケア児の受入を先行して受け入れを行っている藤田綾子さんの実演を見ることで自分たちでもできることが見つけられた。（ペースト食など形態食の用意など）

関屋さん（障害当事者の父）

富士見高原に来て障害のある息子との旅行が楽しみになった。紹介で行った志賀高原でも貴重な体験をすることができた。楽しむ自分たちを映像等で紹介してもらうことは、同じような障害のある子ども、家族にとっても希望になるような気がする。

上原さん（障害当事者）

高校卒業後の家族で行く楽しみな場所になった。私が「ユニバーサルツーリズム」について発信し広げていきたい。

胡桃さん（養護学校教諭）

生徒の顔が事前事後で大きく変わる。今回同行した校長もパラモーションを自発的に動かしている。学校では見たことのない様子だ。障害者は高等部を卒業すると社会に入り、孤立してしまう。養護学校の中にとできないことを今後行っていきたい。

守岡さん（山岳ガイド）

富士見高原のユニバーサルツーリズムに関する取り組みを知っていたが興味はなかった。家族がパーキンソン病になり、外出が難しくなって初めて価値に気が付いた。取組に参加し、家族も自身もとても貴重な体験をすることができた。

【縄文ハロウィン】

縄文ハロウィンの実証実験では、富士見町商工会や富士見町社協と連携することで、より多くのかたにチラシを配布したり、移動用の車両を借りることができた。こうした地域の団体との連携なしでは、今回のような大きな実証実験は実施できなかった。

5. 高齢者の免許自主返納に対する不安軽減

アンケート・インタビューにて受益者の意識・行動の変容を調査（個別訪問）

初期値／初期状態

自主返納について考える機会がない。

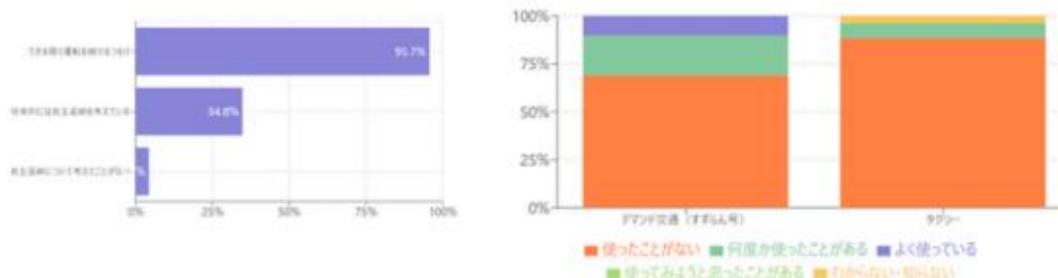
アウトカム発現状況（実績）

自主返納について積極的に考えるようになる

【高齢者】

2025年1月に実施した潜在的利用者（60歳以上の地区サロン参加者）を対象としたアンケート調査で、免許を持っている人のほぼ全員が「できる限り自分で運転を続けたい」と回答。このことから、日常生活における自家用車の重要性がうかがえます。また、免許返納後の地域の足問題の根っこともいえる現状見えてきた。

「できる限り自分で運転を続けたい」と思う人が運転免許を返納する頃には、その人の身体機能や認知機能がすでにかなり低下していることが予想される。これは身体機能や認知機能が免許返納を決断するに至る背景となっていることが多いです。また、長年自家用車を使用してきた方々は、「すずらん号」などの公共交通機関をほとんど利用したことがないという現実がある。



このような状況下で、さらに身体機能や認知機能が低下した状態では、新たに公共交通機関を自力で利用することは非常に困難になる。その結果として、免許返納後は外出の機会が大幅に減少してしまうことが懸念される。これらの問題が連鎖的に発生することで、高齢者の社会的孤立や健康状態の悪化につながる恐れがある。

また、将来的に免許返納が増える可能性を考えると、公共交通サービスの認知度向上や利用体験の改善が重要な課題となる。特に、デマンド交通の利便性（「家の前まで迎えに来てくれる」点）は利用者から高く評価されており、この強みをさらに地域住民に周知していくことが有効と考えられる。

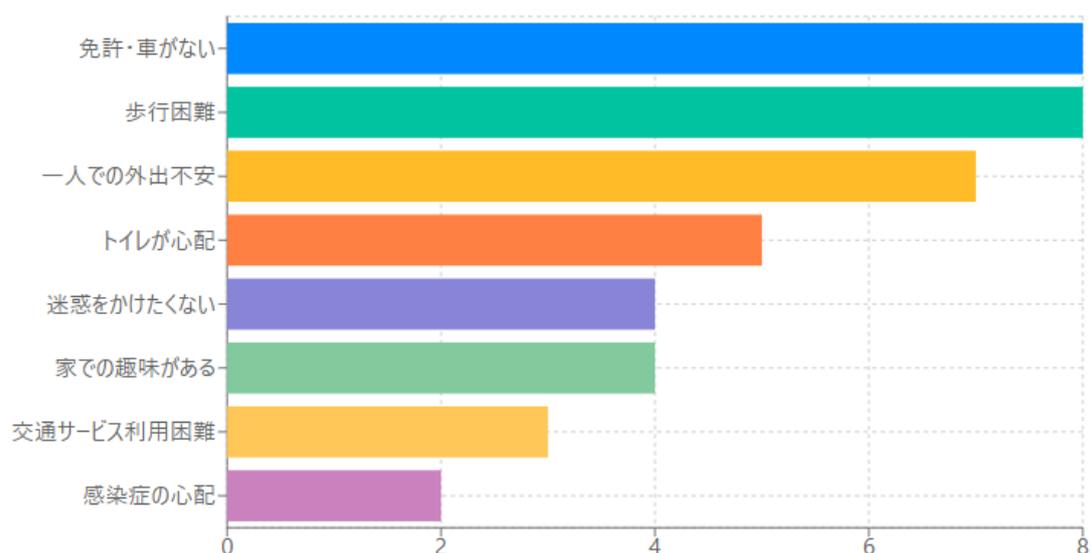
さらに、支援者向けの調査（2022年9月、2023年10月、2025年1月実施）では、外出が健康状態や生活の質（QOL）向上に不可欠であるという認識が広く共有されていた。多くの支援者が、外出支援サービスは利用者の心身の健康維持、フレイル予防、介護予防に貢献すると回答していた。

つまり、地域の足問題を解決のためには、外出を支援すること、ひいては、

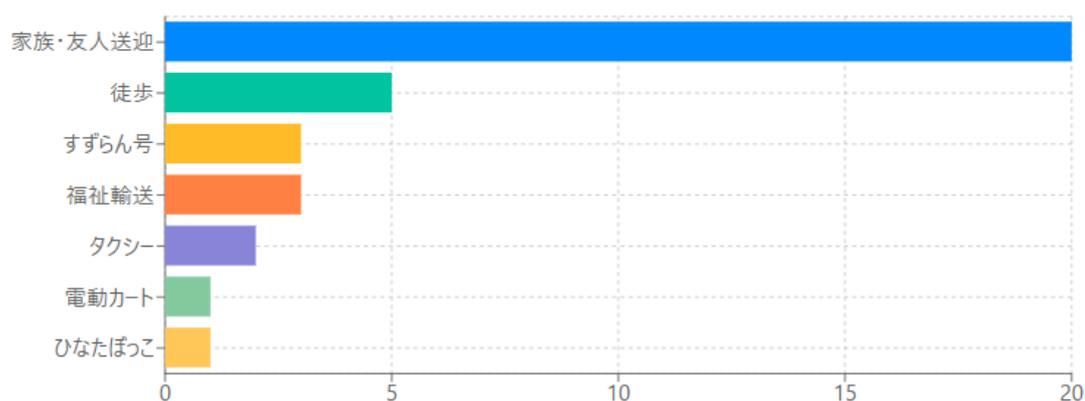
富士見町に暮らす方々の健康と QOL 向上させることを目指すことが重要であるといえる。

富士見町で暮らす方々が健康で活動的な生活を長く続けられるよう、これらの公民連携サービスをさらに拡充し、質の高いサービスを提供するための新たな担い手（運転・見守りボランティア）の参加を促進する取り組みが不可欠である。

自主返納者の外出しづらい理由 (n=22、複数回答)



自主返納者の利用移動手段 (n=22、複数回答)



アンケート結果から、回答者が自主返納に積極的になれる可能性を高めるためには：

- ・代替移動手段の選択肢拡大
- ・現状の家族送迎（90.9%）依存からの脱却
- ・公共交通利用率（13.6%）の向上
- ・社会参加機会の確保

- ・えんがわや音楽会などの高満足度活動の継続・拡充
- ・交通弱者になっても参加できるイベントの充実
- ・外出支援の総合的アプローチ
- ・単なる移動手段確保だけでなくお付き添いなどソフト的支援が重要
- ・歩行困難（36.4%）や一人での外出不安（31.8%）への対応
- ・成功例の可視化
- ・自主返納後も週1回以上外出している72.7%の具体的生活事例の共有
- ・「運転しなくても豊かな社会生活が可能」という事例の提示

これらの要素が整備されると、現在の免許保有者の中でも特に社会参加意欲が高く、かつ運転への不安を感じ始めている層において、自主返納への積極性が高まる可能性があることがアンケート結果から示唆される。

【評価】

1. 高齢者・障害者・子供の社会参加の機会創出

- ・外出の意欲・頻度が向上
 - ▶高齢者：2024年10月に実証イベントの参加者にアンケートを実施
イベントを楽しみにしている、お楽しみのための外出の機会になっている、生活に張り合いが出るようになった、もっと出かけたいと思うようになったという意見を多くいただいた。
- ・自己肯定感の向上
 - ▶高齢者：2024年10月に実証イベントの参加者にアンケートを実施
生活に張り合いが出るようになったという意見を多くいただいた。
- ・高齢者の介護予防、健康寿命が延びる
 - ▶高齢者：2024年10月に実証イベントの参加者にアンケートを実施
外出の機会になっている、生活に張り合いが出るようになったという意見を多くいただいた。
 - ▶支援者へのアンケートを実施予定（2025年1月）
外出支援サービスについて「利用者の心身の健康のために必要である（11/11）」、「利用者のフレイル予防になる（11/11）」「利用者の介護予防になる（10/11）」「利用者の健康寿命を延ばすことにつながる（9/11）」という意見を多くいただいた。

2. 被介護者や子供とその介助者や保護者が自主的に気軽に外出できるようになる

- ・外出の意欲・頻度が向上
 - ▶高齢者：2024年10月に実証イベントの参加者にアンケートを実施
イベントに出かけるのが楽しみ、もっと出かけたいと思うようになったという意見を多くいただいた
- ・介助負担が軽減される
 - ▶支援者へのアンケートを実施予定（2025年1月）
外出支援サービスの提供により「介護者の負担軽減や息抜きの機会に

なる」という意見を多くいただきたい (9/11)

3. 生活だけでなく楽しみのために既存の公共交通機関や民間サービスを利用することへの抵抗感軽減

- ・ 娯楽や楽しみのために積極的民間サービスを使いたいと思うようになる
 - ▶ 有料イベントに参加したいかをアンケートで調査予定 (2025年1月)
- ・ 免許をもつほとんどの人が「できる限り自分で運転をつづけるつもりでいる (22/22)」と回答。このことから、運転免許を返納するころには身体機能や認知機能の著しい低下しており、ほとんどの人が自ら公共交通機関などを利用することはすでに難しい状態であることが想定される。そのため、今後検討すべきは、移動手段を増やすようなハードの拡充ではなく、送迎付きの居場所づくりや見守りボランティア、付き添い (外出先での介助) などの当事者の外出自体を支援するためのソフトの充実である。

4. 分野横断的、内発的な協力体制が生まれる

- ・ ほとんどのイベントに複数層の人たちが常時参加できる
 - ▶ どのイベントも年齢、性別、障害の有無に変わらずどんな方でも参加可能
- ・ 複数団体による共催イベントの開催
 - ▶ 常にどのイベントも2団体以上の共催により実施

5. 高齢者の免許自主返納に対する不安軽減

- ▶ 免許自主返納についての考えをアンケートで調査予定 (2025年1月)
- ・ 免許を持っている60-90代の人で「将来的に自主返納を考えていえる」人は半数以下 (8/22) で、全員が「できる限り自分で運転をつづけるつもりでいる (22/22)」と回答。自主返納について積極的に考えるようになるという結果には至らなかったが、富士見町での暮らしに車が欠かせないものであることが改めて認識できた。

7. 成功要因・課題

① 4団体でおこなったことによる成功要因

単体でのイベント運営は難しかったが、4団体で役割分担をして事業を進めたことで、モデルプランを構築できた。それぞれの団体が持つ強み (専門性) や、地域との繋がりを活用したことで相乗効果が得られたものと考えられた。

2023年および2024年の縄文ハロウインの実証実験では、4団体の協力のほか、協力団体のご支援が得られたため、このような大きなイベントで実証ができた。富士見町商工会と協同で行なったことで宣伝効果が高まった。

今回は属性の異なる団体が集まったことにより、デジタル化、パーソナルモビリティの活用のアイディアを得ることができた。居場所作りへの活用の難しさも明らかになり、課題を整理できた。

イベントを複数回に分け、顔の見える範囲内で行なったため、高齢者・障害

者当事者だけでなく、支援者も含めた意見交換、実務技術の向上を図ることができた。また、地域内で密接に関わる住民と共に体験することは座学やボランティア向け研修以上に実践的な学びの場となった。

医療的ケアを必要とする重度障害者とその保護者等に向けた居場所づくりは、富士見町内だけを想定すると対象者が少なく継続が難しい。反面、全国的には該当者を受け入れ可能な観光施設はない。町外の重度障害者を合わせて対象とすることで事業の規模を維持し、町内の当事者向けサービスへ還元することが可能となる。

協力団体である富士見町社会福祉協議会には活動全般においてご協力いただき、円滑に実施することができた。

② 外部との連携の実績

- ・富士見町内各地区社会福祉協議会

令和4年5年の研修やイベント実施により令和6年度は地区社協担当者が中心となって日程調整。富士見高原リゾート担当者においても通常の受入れ方法で対応可能となった。

- ・養護学校（特別支援学校）花田養護学校、諏訪養護学校が中心となり、県内の養護学校に令和4、5年度事例が紹介された。これにより重度障害者（医療的ケア含む）を中心に遠足、修学旅行の利用が増加した。

- ・長野県観光部、観光機構との連携により、活動の様子を動画にて紹介されると共に、2025年1月28日に東京都で行われた国内旅行推進フォーラムにて長野県ブースの中で「ユニバーサルツーリズム」の事例を紹介した。

- ・東京都アクセシブルツーリズム推進事業においては2024年12月にパーソナルモビリティの活用方法を指導、2025年の推進フォーラムにて事例を紹介した。現地視察を含め問い合わせをいただいている。

- ・静岡県観光部 「ユニバーサルツーリズム」に関する条例制定に向けた勉強会にて県職員、県議会議員向けに活動紹介。次年度以降の協力依頼もあった。

③ 波及効果

- ・観光団体の視察増およびジオパーク協議会への提言

障害や年齢にかかわらず共に楽しめる環境の提示はコロナ後の他地域においての参考になると考えられ、大学や観光地域からの視察受け入れを行なった。ジオパーク協議会に対しては「共に楽しめる居場所」の提示としてビジターセンター周りの改修およびソフト開発を提言、来年度以降の事業に盛り込んでいただけることとなった。

- ・東京都、鳥取県、静岡県、兵庫県での事例紹介

パーソナルモビリティを活用した居場所づくり、受入環境整備は東京都、鳥取県等のイベントにて紹介すると共に、事前事後の視察受入につながった。静岡県においては「ユニバーサルツーリズム」に関する条例策定に向け事例

を紹介、継続しての連携を依頼された。2025年2月には観光庁職員の参加する勉強会にて事例を紹介、全国のユニバーサルツーリズム実践者と情報共有した。長野県では長野県観光機構が取り組みを紹介2月末の公開を予定している。

- ・障害者支援団体での事例

山梨県の障害者支援団体受入れから、現地でのイベント運営支援につながった点は、当地域だけに限定された取り組みが水平展開可能であることを再確認できた。

- ・町外の社会福祉協議会や旅行会社においては町内事業での実績を元にしたプランを販売。令和7年度以降も継続的に誘客を見込む。

④ 全体を通じた課題

- ・達成が困難なアウトカム（運転ボランティアの数は達成できなかった）

想定していたアクティブシニア層のライフスタイルの変化及び、ボランティア人材の高齢化。どの分野でも人手不足がある（深刻）が、特に外出支援は特にボランティアで成り立っているケースが多い。そのため、事業化が難しい部分があり、収益を得られにくいため、民間や若者が参画しづらい産業構造となっている。

- ・高齢者の外出支援について

高齢者のライフスタイルの変化に応じて、サービスを見直していく必要がある。高齢者の運転免許の返納後の外出支援の充実が必須であり、どんな外出支援サービスがあるかの周知が必要。ハードよりもソフト的な移動支援の充実（既存サービスと連携した新サービスの開発、人材確保）が優先的に必要である。

- ・3年間という事業期間

この事業を実施するにあたり、ゼロからスタートできたかは疑問である。事業前の5年間ぐらいの取り組みがあったからできたこともある。また、事業後に会社としての地域貢献（地域での実証）、収益事業に繋げられるかは課題である。

- ・富士見町役場との連携不足

地域交通を考え実践していくためには、富士見町役場との連携は不可欠である。富士見町役場との連携は、今回は成果としては出にくかった。提案という形での関わり方をしたが、採用されにくく、連携が難しいと感じた。採用してもらうために、提案の内容や方法を考えたり、変えたりする時間は取れなかった。

- ・P35で積極的な免許返納に関する示唆を提示したが、（過去10年とってみて

も、地域の足問題に関する解決策がほとんど提示・実行できなかつたことから) いずれも実現には時間がかかりかかると想定される。既に制度の狭間で困難を極めているひとから優先的に支援できるよう、即効性がある施策をとにかくすぐ時限的に試用・拡充させていくことが必要。デマンド交通、ひなたぼっこ友の会、みんなの居場所、おつきそい人の認知拡大や若年層の利用体験の機会をつくる、または、中高年向けの安全運転講習会の定期的開催し、安全運転に関するスキルチェック・見直しの機会を作るなどが実行的かと。免許返納ではなく、年を重ねても安全に運転し続けられるよう、当事者だけでなく町民全体の意識改革や安全教育を行なうことが必要。

8. 結論

① 社会的インパクト評価の構成要素別自己評価

	多くの改善余地がある	想定した水準まで少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
ア 課題やニーズの適切性					○
イ 事業設計の整合性				○	
ウ 実施状況の適切性				○	
エ 事業成果の達成度				○	

本事業は中山間地域である富士見町において、年齢・性別・障がいの有無に関わらず、当人もその家族も、楽しく役割をもって活躍し続けられる社会を目指し、自家用車に依存することなく、富士見町に暮らす人・訪れる人がやりがい、生きがい、楽しみを感じられるようになることを目的に活動を行ってきた。3年間の活動を振り返ると、4団体の得意分野を活かした活動を展開し、地域の協力団体のご支援のもと、これまでに富士見町にはなかったサービスやツールの開発が実施できたと考えられた。高齢化の進む地域での共通の課題や、障がい者の野外アクティビティの受入れ事例の少ない現代においては、本事業における取り組みはその解決策のひとつを体現していると思われた。

上記の課題やニーズの適切性は、想定した水準以上にあると判断した。本事業における課題は、例えば行政の介入によって大きく改善されたということではなく、今もなお深刻な課題としてある。そのため、課題の解決策を示すことができた点は、社会的に大きな意義があるであろう。

事業設計の整合性、実施状況の適切性、事業成果の達成度は、アウトカムの分析をもとにいずれも想定した水準にあると判断した。居場所+移動支援の提

供は利用者の満足度が高く、ユニバーサルツーリズムの実践は障がい者の貴重な野外アクティビティの場になっている。さらにこれらは、事業化の見通しも立っている。

② 提言

・地域の足問題を解決するためには、外出を支援すること、ひいては、富士見町に暮らす方々の健康と QOL 向上させることを目指すことが重要であるといえる。富士見町で暮らす方々が健康で活動的な生活を長く続けられるよう、これらの公民連携サービスをさらに拡充し、質の高いサービスを提供するための新たな担い手(運転・見守りボランティア)の参加を促進する取り組みが不可欠。

・高齢者及び後天的障がい者福祉において、当事者が健康で生き生きと自活できるようにするために、外出支援は不可欠。一方で、現在の社会福祉制度におけるサービスですでに人手不足が発生しており、新たな外出支援サービスの構築・整備は難しい状況。その中で、サービスの狭間で自活の機会を失っている人が目に見えて増えてきている。企業や若い人たちが外出支援事業に参入できるよう、抜本的な社会福祉サービスの見直し、産業構造の改革の必要性を感じている。殊、富士見町においては、地域の足問題に関する解決策が長年未解決のままである。高齢者の免許返納は確かに安全上、また、社会的に必要かもしれない。しかしながら、車なしでは生活が成り立たない富士見及び同様の中山間地域では、車に代わる代替案がないままでは免許返納は現実的ではない。

そのため、免許返納ではなく、年を重ねても安全に運転し続けられるよう、当事者だけでなく町民全体の意識改革や安全教育を行なう、加えて、お付き添いのような外出支援に特化した新サービスの普及推進及び、運転・見守りボランティアの育成などのソフト的な施策などの方が現実的かつ即効性があるのではと思われる。幸いにも、富士見町は医療・福祉的リソースは近隣市区町村より充実している。こうした強みを活かし、首長及び行政担当者がしっかりと旗振りをして、事業者同士が連携して地域の足問題の解決に向けたスキームづくりといち早く構築することが求められている。

③ 事業からの学び・知見・教訓

コロナ開けの 2022 年、2023 年は養護学校担当者等と外出余暇・居場所づくりについて模索する年度であり、2024 年に現時点でのモデルプランを構築できた。障害児者の居場所づくりは市町村単位では事例が少なく、共有が難しい。事例紹介や意見交換を行った東京、鳥取、静岡の担当者によると、医療的ケア児童を含む障害者を対象に外出余暇支援を行っている事例は無いと評価された。山梨県の団体と行ったイベントにおいては当事業での取組が水平展開可能であると再確認できた。多くの障害者家族に居場所ができることを願っている。

④ 出口戦略・事業の持続化に向けた戦略の成果

事業終了後は、後継団体（ふじみ MaaS 協議会：株式会社イーエムアイ・ラボ、富士見高原リゾート株式会社、地域モビリティプロジェクトチーム）で以下の

活動を行なう。また、本事業で作成したガイドラインの活用を進める。

- ・LINE をフロントにした専用アプリの普及を目的に、2025 年度の長野県元気づくり支援金に応募した。これは本事業で開発したアプリを普及させるための取り組みで、町内の 3 団体に対して利用のサポートをし、収益事業に向けた準備をするものである。

- ・富士見町商工会から、2025 年度の縄文ハロウィンでの移動支援の依頼があったため、開催に向けて協議をしている。過去 2 年にわたり、富士見町商工会とは縄文ハロウィンの移動支援を行なったが、2025 年度は町外まで範囲を広げ、広域の移動支援の実証実験を予定している。

- ・「団体ごとの公式 LINE+アプリのシステム」を使用し後継団体でアカウントの運用を支援する。アカウント運用費を収入に繋げる試みを実施予定。

- ・障害者支援事業の展開

- 参加した支援者および当事者は独立し法人化を予定している。

- ・養護学校卒業後の居場所づくりを行う任意団体を設立予定

- (花田養護学校：胡桃先生)

- ・医療的ケア児を中心とした障害者と家族を対象とした支援会社設立

- (藤田綾子 合同会社 FuZi)

- 養護学校の遠足、宿泊学習の継続

- ・養護学校と連携し送迎に関する役割分担が可能となった

- (諏訪養護学校、花田養護学校、松本養護学校)

- ・新規の養護学校の予約がある (2025 年 3 月現在)

- (木曾養護学校、伊那養護学校)

- ・県内外旅行会社との連携強化

- 取り組みを理解した旅行会社に案件を紹介いただけるようになった。

- (日報ツーリスト、来夢ツアー、信南交通、アリーナ交通)

- 継続的なイベント実施により運営主体ができることが増加し、同行者の負担が軽減されたため、イベント実施・受入が容易になった。

- ・障害者支援団体

- (ほっとクラブ、ぽかぽかキャンプ、絆プロジェクトなど)

- ・高齢者支援事業の展開

- (地区社会福祉協議会職員 等)

- 高齢者を対象とした旅行商品は 3 ヶ年で売上約 5 倍となり、今後の増加が想定される。

- ・魅力的な居場所づくりに関する事業展開について

年齢・性別・障がいや免許の有無に関わらず誰もが集える「=魅力的な居場所」づくりに関しては、本事業期間で課題整理や解決策の糸口をつかむことができ

た。今後はふじみ MaaS 協議会のスキームとは別での事業展開とはなるが、引き続き協力団体及び同協会とは連携もとりながら下記の通り進めていきたい。

【課題整理】

地域の移動支援・外出支援の継続には 人材の確保と分野横断的な連携が必要であることが明らかになった。特に、以下の課題が浮き彫りになった。

1. 運転・見守りを担う人材の不足

移動支援に必要な運転者や見守り役の人材が不足しており、参加者数や開催頻度の維持が困難になっている。持続可能な仕組みを構築するためには、人材の確保と育成が急務である。

2. ボランティアの高齢化と協力者の減少

これまで活動を支えてきたボランティアの高齢化が進んでいる。加えて、人口減少により 将来的に協力者の総数そのものが減少する見込み である。さらに、健康なうちは仕事を継続するのが一般的になり、ボランティアとして協力できる人材は減少していくと予測される。

3. ボランティア依存型の仕組みの限界と持続可能な運営の必要性

現在の外出支援（＝介護予防・フレイル予防）はボランティアの協力によるところが大きいですが、中長期的にはこの形では継続が困難である。民間企業の参入や、若い世代が仕事として参画できる仕組みの整備が必要 であり、ビジネスとして成立する持続可能なモデルへの転換が求められる。

【実証終了後の展開】

1. 外出支援ガイドブックの作成（2025年3月）

外出を希望する人、支援に協力したい人の双方に向け、必要な情報を提供するガイドブック を作成。地域の移動支援をより活用しやすい環境を整えた。

2. おつきそいサービスの料金改定と利用者動向の調査（2023年9月・2025年3月）

外出支援の持続性を高めるため、おつきそいサービスの料金を段階的に見直した。料金改定後も契約を見送った利用者はゼロであり、移動支援サービスのニーズと期待の高さを再確認。今後もサービスの質を維持しながら、利用しやすい適正な価格設定を模索していく。

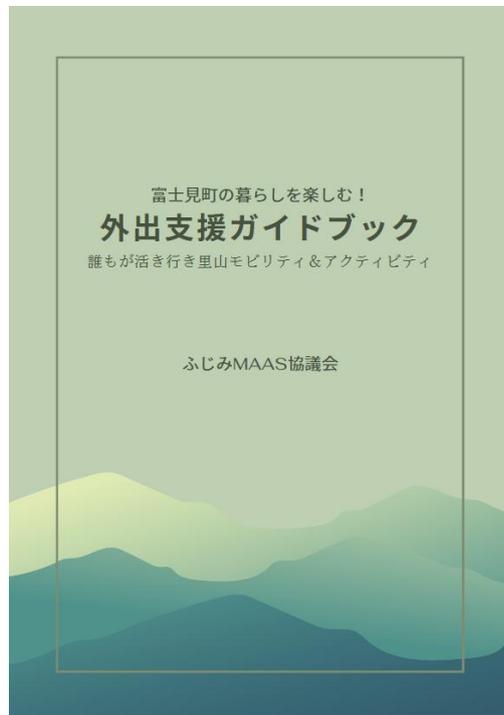
3. 「みんなの居場所」の活動内容見直し（2025年3月～）

実証実験終了後も、月4回開催・平均参加者10.6人の規模を維持していたが、事業の持続可能性を考慮し、運営体制を見直し。参加者のやりがいや張り合いにつながる活動に特化し、それ以外の誰もが楽しみながら参加できる活動は協力団体にて企画運営をお願いした。今後も、組織横断的な連携をとりながら、持続可能な移動・外出支援の仕組みを構築するため、地域のニーズに応じたサービスの改善と、民間企業・若年層が関われる仕組みづくり を進めていく。

9. 添付資料（イベントのチラシ、活動写真、記事紹介等）

移動手段・外出支援＋魅力的な居場所に関するアウトプット

1 活動報告書 ②外出支援ガイドブック ③ガイドライン



魅力的な居場所づくり企画・運営ガイドライン

中山間地域の富士見町における「地域の足問題」は自家用車中心の暮らしに起因する。その不利益を破るのは主に「自家用車をもたない交通弱者＝高齢者・子供・障がい者とその家族・介助者」。また、自家用車中心の暮らしにおいて、車がなく外出を制限されることで（社会的）フレイル状態となり、心身の健康が阻害されることが様々な社会問題として表出し、今後、こうした状況が少子高齢化を背景に加速度的に深化すると考えられる。しかしながら、「移動手段」を充実させることだけではこうした課題は解決できず、受益者が車がなくとも社会の一員であるという安心感を得られるような「役割・やりがいのある場所（居場所）」とそこにアクセスするための「移動手段」「外出支援」が一体化した新しい仕組みづくりが求められている。

- ✓ 魅力的な居場所の要件
 - ITの活用
 - 関係者との情報共有
 - 見守りスタッフ常駐
 - アクティビティ用 歩行補助具の貸出
- 魅力的な居場所（移動手段・外出支援＋居場所）
 - 余暇活動のための外出支援
 - 送迎
 - （社協車・ご近所同士の乗合）
 - 週1回開催
 - 誰もが参加可能で楽しめる活動
 - やりがいや張り合いにつながる活動

©2025 合同会社つくらボ

くらざわ縄文シャトル実証運行のご案内

「縄文ハロウィンホコ天祭り」と「高原の縄文王国収穫祭」の開催に合わせて、社会福祉協議会「暮らしサポート富士見」運転ボランティアのご協力を得て、高齢者・小中学生の方を対象に2つのお祭りへの送迎シャトルの実証運行を行います。

運行日：2023年10月21日(土) 10:00~17:30
 利用料金：無料
 予約：事前予約制 申し込み締め切り10月18日(木)
 ※ 定員になり次第締め切りとさせていただきます。

乗降場所：最寄り地区公民館
 エリア1：富士・南原山・立沢・乙事方面
 エリア2：栗生・神戸・松目・若宮方面
 エリア3：富士見台・机・滝沢・黒木・徳濃境方面

運航便：
 ● 回遊便 (3ルート各定員6名)
 「縄文ハロウィンホコ天祭り」のイベントを楽しむコース
 10:00-10:30 各エリア発 → 11:00 井戸原考古館着
 12:30 井戸原考古館発 → 13:00 富士見駅前着
 14:15 富士見駅前発 → 14:30-15:00 各エリア着
 ● ホコ天シャトル (3ルート各定員3名)
 都合に合わせて乗降時刻を並び「縄文ハロウィンホコ天祭り」を楽しむコース
 (行) 各エリア→富士見駅前
 ①11:00-11:30発 ②11:30-12:00発 ③12:00-12:30発
 ④12:30-13:00発 ⑤13:00-13:30発
 (帰) 富士見駅前→各エリア
 ①15:00発 ②15:30発 ③16:00発 ④16:30発 ⑤17:00発

予約方法：電話 0266-78-8550 (社会福祉協議会 ふらっと)
 受付時間 月~土 10:00~19:00

パソコン・スマートフォン 予約フォーム ----->

主催：ふじみMaaS協議会・富士見町社会福祉協議会
 ※ 悪天候等により「縄文ハロウィンホコ天祭り」が延期になった場合は、シャトル実証運行を中止させていただきます。

乗り物を使って、 富士見の秋を楽しもう！

10.19(土)

10/19(土)は町内でさまざまなイベントが行われます。当日は無料で「周遊シャトル便」「デマンド便」の運行を行います。ご利用ください！
 (→乗り方&申込み方法は裏面参照)

お問い合わせ先：富士見町商工会 主催：ふじみMaaS協議会、富士見町社会福祉協議会
 現 0266-62-2373 後援：富士見町教育委員会、富士見町商工会

移動の仕方は2通り

① 周遊シャトル便

予約不要で乗降自由
イベント会場間を行き来できます。

富士見駅前	松崎結集場	徳濃境集場	考古館発
行き発 栗吉駅	行き発 栗吉駅	行き発 栗吉駅	行き発 栗吉駅
10時 00	10時 15	10時 35	11時 00
11時 00	11時 15	11時 35	12時 00
12時 00	12時 15	12時 35	13時 00
13時 00	13時 15	13時 35	14時 00
14時 00	14時 15	14時 35	15時 00

② デマンド便

要予約
近くの公民館からまちなかへ行き来します。(定員20名)

行き便	帰り便
富士見駅前 9:00発 栗吉駅 9:50着	富士見駅前 13:30発 栗吉駅 14:20着
10:30~11:00発 11:10着 11:20着	15:00発 15:10着 15:20~15:50着
12:00~12:30発 12:40着 12:50着	16:30発 16:40着 16:50~17:20着

【予約方法】
 LINEでの申込み ~10/12(土)まで
 友だち登録 トップ専用アイコン 登録フォーム入力

電話での申込み 0266-78-8550 (富士見町社会福祉協議会 ふらっと)
 10/1(火)~10/12(土)まで 受付時間 月~土 10:00~18:00
 ※万が一、悪天候等でイベント中止・延期になった場合は、周遊便運行を中止させていただきます。

障害者とチャレンジフェア 2024

富士見高原リゾートは障害者の有無に関わらず「誰とでも楽しめる場所」を目指した取組を整えています。協力・協働いただく皆様とこれまでの活動を振り返り、これからの活動を一緒に考えましょう。

日時：2024年11月16日(土) 10:00~12:00
 会場：富士見高原リゾート 八景苑の運動場のひろば
 参加料：無料 (誰でも参加いただけます)
 内容：屋外用車いす体験会、障害者支援活動報告
 ※雨天時は八景苑の宴会館にて報告会を中心に開催します

10:00~ JINRIKI 試乗体験会
 ゲスト講師 中村正典氏
 JINRIKI 開発秘話や実演をいただきます。
 展示販売もあります。

10:30~ 養護学校遠足体験会
 ゲスト講師 須崎直氏 越田綾子氏
 養護学校の野外遠足を再現し、引率者、支援者の視点から解説いただきます。

11:00~ 職員とチャレンジ報告会(チャレンジプロジェクト)
 ゲスト講師 加藤久氏
 車いすでの職員生活、業務進行や達成感の思い出や障害当事者の加藤さん、支援参加者それぞれからのお話し、合わせて訓練の再開も伺います。

同時開催 屋外用車いす・障害者アクティビティ体験会
 ハロエーション HPPPO 天空カート (多様な車体あり) ハンモックと焚き火

主催：ふじみMaaS協議会 富士見高原リゾート 問合せ先：090-4372-1975 (藤田)



縄文ハロウィン (2023年10月21日)



縄文ハロウィン (2024年10月19日)



モビリティ体験 (23/7/22 サマー子ども&ユースフェス)

20230722 長野日報

**生演奏を“池のほとり”で
富士見 つくえラボが「音楽会」**

根本康史さんのピアノ演奏を楽しむ参加者

富士見町の合同会社「つくえラボ」は、同日の富士見高原リゾート「池のほとり」で、音楽会を開催し、生演奏を楽しむ音楽会を開催した。

同日富士見高原リゾート「池のほとり」で開いた。町内で音楽教室を開く根本康史さん(37)・同町田嶋(37)が電子ピアノでクラシックや歌謡曲、童謡唱歌などの曲を披露。参加者は自然の中で生演奏を楽しんだ。

根本さんが進める、社会と音楽との接点を設ける活動に「じいろむじか」のコンサートとして開催。つくえラボが企画する高齢者を主役にした「金曜日集い」(えんがわ)の一環としても行い、同町瀬田新田区や富里区などから人が集まった。

根本さんは、「風の音やセミの鳴き声を聞きながら楽しんで」と呼び掛け、シニア映画の挿入歌「あの夏へ」や歌謡曲「川の流れるように」などを披露。アンコールには、全員で歌いながら音楽を演奏した。

参加した大久保照子さん(70)は、「一曲と盛りだくさんの生演奏を聞く機会は少ないので、とても感動した。電子ピアノでクラシックや歌謡曲、童謡唱歌などの曲を披露。参加者は自然の中で生演奏を楽しんだ。」と話す。

(濱野貴)

**自然共生型の
水路や湧水見学**

富士見で講座

富士見町の「みんかの富士見」と「富士見の自然と文化を学ぶ」は、同日、同町西山地区の水路や湧水を見学するため、参加者の多くは、自然共生型水路・湧水・里山の魅力発掘を目的として、町民ら5人が参加。環境整備に携わっていた御山神

林さんは整備中の写真を見せながら特徴を説明。生き物が住むように石を置いたところ、工事の終わった0.00年からの徐々に変わっていくように見えた。今は景観を学ぶ。同町西山地区の水路や湧水を見学するため、参加者の多くは、自然共生型水路・湧水・里山の魅力発掘を目的として、町民ら5人が参加。環境整備に携わっていた御山神

富士見町大平区の自然共生型水路ですみくもく昆虫などを説明する小林克明さん(左)

長野日報 23/7/2

長野日報 23/5/30



ネイチャーポジティブ（2024年3月9日）での移動支援

パーソナルモビリティのイベントでの使用例



箕輪町（2024年9月7日）



長野市 (2024年9月23日)

アウトブットに関する記事紹介

長野県観光局による web 記事と動画紹介 「GO NATURE GO NAGANO」

2024年9月の車いすでの硫黄岳登頂に同行した長野県観光機構および制作会社に対し「障害者の居場所づくり」としてのユニバーサルツーリズムに関する記事紹介を依頼。山梨県から参加の団体を取材し紹介いただいた。障害当事者や保護者のコメントが多く採用されており、同様な団体の活動の参考になる内容になっている。

県内他地域の紹介においては学生向けパーソナルモビリティ体験の講師を依頼している小松氏が自身がモニターになり活動紹介。障害当事者の社会進出が促進されている。

小松さんが考えるユニバーサルツーリズムには、2つの側面があります。1つは、障害の有無や年齢も関係なく誰もが自由に楽しめるように施設やサービスを整えること。もう1つは、障害当事者が主体的に参加できるような環境を整えること。この2つを両立させることが、ユニバーサルツーリズムの鍵となります。



<https://vimeo.com/1064157400>



https://www.go-nagano.net/go-nature-go-nagano/article/universal?fbclid=IwY2xjawJlsl.dleHRuA2FlbQlxMAABHRb9tBjdm7Po_75JxhH74sRFc9pIFrS_4d0

アウトプットに関する記事紹介

2023年6月に開催したパーソナルモビリティ体験会参加者から「車いす利用者の高齢男性と共にハケ岳へ登頂したい」との申し出があり、機器の選定やトレーニングに一年をかけ、2024年9月にハケ岳硫黄岳への登頂を果たした。車いす利用者は2025年2月に永眠。地域内の看護師、介護士、理学療法士ら参加者は故人の意思を尊重し、車いす利用者のレクリエーション支援など今後の活動継続を見込んでいる。ハケ岳登山には長野県観光機構、信濃毎日新聞等が同行し、参加者の声を記事と画像映像で紹介している。

長野県観光機構 HP GO NAGANO
<https://vimeo.com/1030970752>



信濃毎日新聞 (20240927)



長野日報 (20240925)

アウトプットに関する記事紹介

2025年1月、2月の2回 東京都等が主催するアクセシブルツーリズム (ユニバーサルツーリズム) の勉強会および意見交換会にて当協議会の活動、富士見高原リゾートの活動を紹介、2回にわたり東京新聞にて紹介いただいた。記者：山崎まゆみさん (跡部女子大講師)

紹介内容 支援学校や支援団体、家族の関わる障害者のキャンプ、旅行、外出支援



アウトプット 障害者の居場所づくり

他地域での事例紹介

パーソナルモビリティを活用した居場所づくり、外出機会作りを中心に他地域にて事例紹介や実地ワークショップを行った

鳥取県 あいサポートフェス

兵庫県 城崎温泉ユニバーサルツーリズム普及 WS

東京都 アクセシブルツーリズム

静岡県 ユニバーサルツーリズム条例検討 PT (県議会)



城崎温泉 JINRIKI を活用した街歩き



鳥取県 支援学校の外出支援活動紹介



東京都 JINRIKI 等を活用した森林散策

アウトプット 障害者の居場所づくり

他地域からの視察受入

パーソナルモビリティを活用した居場所づくり、外出機会作りを中心に事例紹介や実地ワークショップを行った

長野県 観光誘客課 事業者向け WS

兵庫県 神戸市議会 ユニバーサルツーリズム WS

東京都 板橋区 区議員視察

山科大 ジオパークのアクセシビリティ向上へ向けた調査

全国ジオパーク協議会にて富士見町の取り組みを紹介
令和7年度は他地域のジオパークにて WS を予定



神戸市議会議員による JINRIKI 体験



長野県観光誘客課と共催による受入セミナー
講師は JINRIKI 中村社長、花田養護 胡桃先生



板橋区議会議員 富士見町にある自然の家の
障害者利用についても併せて協議した



山科大視察対応

アウトプット 障害者の居場所づくり
 地域内の学生向け障害者接遇研修
 パーソナルモビリティを活用した居場所づくり、外出機会作り
 を中心に事例紹介や実地ワークショップを行った
 富士見高校
 富士見中学校
 南諏地区教職員組合 他

障害当事者である花田養護学校OB小松氏を講師とし、接遇体験や
 注意、車いす利用方法などを学習した



教職員向け体験会



パーソナルモビリティ体験 交代で乗車や牽引を体験



小松氏による当事者目線での接遇についての講習

アウトプット 障害者の居場所づくり
 地域内の高齢者、障害者支援者向け体験会
 パーソナルモビリティを活用した居場所づくり、外出機会作り
 を中心に事例紹介や実地ワークショップを行った
 諏訪郡民生児童委員
 富士見町地区社協
 SNACの会（別荘利用者の任意団体）
 絆プロジェクト 他

住民を対象にモビリティ活用のWSを行い、当事者と同行するイメージ
 を描いていただく。ここから地区社協を中心としたフレイル予防
 の外出支援イベントや八ヶ岳登山チャレンジにつながった。



諏訪郡民生児童委員研修



SNACの会体験会（ほとんどが高齢者）



地区社協職員向け体験会



絆プロジェクトへつながる体験会



障害者とチャレンジフェア
 講師は JINRIKI 中村社長

アウトプット 障害者の居場所づくり
 地域内の特別支援学校の受け入れ
 パーソナルモビリティを活用し、特別支援学校の遠足や宿泊学習の
 受入を行った
 花田養護学校 諏訪養護学校
 松本養護学校 寿台養護学校
 小諸養護学校 飯田養護学校 他

教員や医療従事者保護者との打ち合わせから遠足実施まで繰り返し
 実施が可能となり、期間内で協力者を含めたノウハウが蓄積
 令和6年度には12回の受入が可能となった。
 令和7年度も継続して予約をいただいている。



遠足の様子 医療的ケアなど障害の程度に合わせる



教職員との打ち合わせ 遠足を想定し、モビリティや
 昼食等細かい打ち合わせや機器の利用体験を行う



宿泊学習での花火 リクエストに答える

アウトプット 障害者の居場所づくり
 障害者支援団体の受け入れ
 パーソナルモビリティを活用し、支援団体の要望に合わせた
 外出レク受入を行った
 ほっとクラブ（安曇野市）
 花田養護学校OB回（諏訪郡）
 ほかほかキャンプ（山梨県）
 村山支援学校雪国教室（東京都） 他

定期的な開催より、保護者、医療従事者など多様な視点から
 多様な利用者受入に対する実績の構築が可能となった。
 また、参加者は他地域の居場所づくり等にて当事者モニター
 として参加するようになった。



花田養護学校OB 上原さんは当事者モニターとしてテレビ出演あり



ほっとクラブ 医療的ケア児を中心とした外出



ほかほかキャンプ 発達障害や医療的ケア児の参加

